

仙台市文化財調査報告書第219集

安 久 遺 跡

— 第3次発掘調査報告書 —

1997. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第219集

あん きゆう
安 久 遺 跡

— 第3次発掘調査報告書 —

1997. 3

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大なご協力を賜り、
まことに感謝に絶えません。

仙台市の南部に位置する西中田地区は、以前、近郊農業地帯
として推移して参りました。近年では、市街化が急速に進み、
仙台市のベッドタウンとして生まれ変わりつつあります。

安久遺跡の調査もこうした市街化の流れの中で、第3次調査
として実施されました。過去に行われた発掘調査では、古墳時
代終末期の古墳や古代の集落跡が発見されました。今回の調査
ではそれらは検出できませんでしたが、生活の様子を探る手が
かりとなる様々な遺物の出土があり、また、平安時代や中・近
世の溝跡などが検出され、新たな知見も加わりました。

この報告書が皆様方の歴史研究の一助として広く活用され、
文化財に対するご理解と保護に役立ちますことを念じております。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の刊行に際し
て、ご協力下さいました皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成9年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 笠 克 彦

例　　言

1. 本書は共同住宅建設工事に関わる安久遺跡の発掘調査報告書である。
2. 出土遺物の整理と報告書作成は平間亮輔、伊藤孝行が担当し、編集は伊藤が行った。陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。なお、本文の執筆分担は第1章、第2章は伊藤、第4章は平間が行ったが、第3章の執筆については古環境研究所に依頼した。
3. 発掘調査および報告書作成にあたっては柿沼一夫氏、株式会社大京の協力を受けた。
4. 本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1. 本書中の土色については「新版標準土色帖」小川、竹原1995を使用した。
2. 本書使用の地形図は国土地理院発行5万分の1「仙台」、仙台市都市計画課作成の2.5万分の1「都市計画図」である。
3. 本書中の北は真北を示している。
4. 遺構の略称としてSD：溝跡、P：ピットを使用した。
5. 土師器の黒色処理はスクリーントーンで示した。
6. 遺物の法量のうち（ ）は図上復元値である。
7. 引用・参考文献は巻末にまとめた。

目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査要項.....	1
第2節 遺跡の概要.....	3
第3節 調査方法.....	4
第4節 基本層序.....	5
第2章 検出された遺構と遺物.....	8
第1節 遺構の検出状況と概要.....	8
第2節 IVa層の遺構と遺物（1）.....	8
第3節 IVa層の遺構と遺物（2）.....	15
第4節 下層の調査.....	26
第5節 その他の出土遺物.....	28
第3章 プラント・オバール分析.....	29
第4章 まとめ.....	31
報告書抄録.....	56

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の地形.....	1
第2図 周辺の遺跡.....	2
第3図 調査区位置図.....	3
第4図 調査区設定図.....	4
第5図 基本層序.....	5
第6図 遺構全体図.....	7
第7図 SD 1 断面図.....	8
第8図 SD 2 断面図.....	8
第9図 IVa層上面全体図（1）.....	9
第10図 SD 1～5 平面図.....	10
第11図 SD 4・5 断面図.....	11
第12図 SD 6・7・10 平面図.....	12
第13図 SD 6・7 断面図.....	13
第14図 SD 6 出土遺物.....	13
第15図 SD10 断面図.....	13
第16図 IVa層上面全体図（2）.....	14
第17図 SD 8 断面図（1）.....	15
第18図 SD 8 平面図.....	16
第19図 SD 8 断面図（2）.....	17
第20図 SB 8 平面・断面図（東部）.....	18
第21図 SB 8 平面・断面図（綱脚部）.....	19
第22図 SB 8 出土遺物（1）.....	20
第23図 SB 8 出土遺物（2）.....	21
第24図 SD 9 平面図.....	22
第25図 SD 9 断面図.....	23
第26図 SD 9 出土遺物.....	23
第27図 SD11 平面図.....	24
第28図 SD11 断面図.....	25
第29図 SD11 出土遺物.....	25
第30図 A-3 試掘区Va層上面平面図.....	26
第31図 A-3 試掘区断面図.....	27
第32図 A-3 試掘区出土遺物（Vc層）.....	27
第33図 B-4 試掘区断面図.....	28
第34図 その他の出土遺物.....	28
第35図 遺構変遷図.....	33
第36図 安久遺跡・安久東遺跡遺構全体図（略図）	35

挿表目次

表 1	周辺の遺跡地名表	2
表 2	安久遺跡調査次数表	4
表 3	安久遺跡のプラント・オパール分析結果	30
表 4	破片集計表	32

写真図版目次

[遺構]

写真 1	基本層序 (1)	39	写真19	SD 8 完掘状況	45
写真 2	基本層序 (2)	39	写真20	SD 8 橋脚ピット	45
写真 3	調査風景	39	写真21	SD 8 橋脚ピット	45
写真 4	SD 1・2 確認状況	40	写真22	SD 8 漆器碗出土状況	45
写真 5	SD 1・2 完掘状況	40	写真23	SD 8 出土の河原石	45
写真 6	SD 1 断面	40	写真24	SD 8 断面 [B-B']	46
写真 7	SD 3～5 完掘状況	41	写真25	SD 8 断面 [C-C']	46
写真 8	SD 5 完掘状況	41	写真26	SD 9 確認状況	46
写真 9	SD 4・5 断面	41	写真27	SD 9 完掘状況	47
写真10	SD 6 確認状況	42	写真28	SD 9 断面	47
写真11	SD 6 完掘状況	42	写真29	SD 11 確認状況	47
写真12	SD 7 完掘状況	42	写真30	SD 11 完掘状況	48
写真13	SD 7 断面	43	写真31	SD 11 完掘状況	48
写真14	SD 10 完掘状況	43	写真32	SD 11 断面	48
写真15	SD 8 確認状況	43	写真33	A-3 試掘区 V a 層上面検出状況	49
写真16	SD 8 堆積土上層の状況	44	写真34	A-3 試掘区 V c 層中遺物出土状況	49
写真17	SD 8 堆積土下層の状況	44	写真35	B-4 試掘区 V a 層上面検出状況	49
写真18	SD 8 底面 (溝状の窪みの確認状況)	44			

[遺物]

写真36	SD 6 出土遺物	50	写真40	SD 9 出土遺物	53
写真37	SD 8 出土遺物 (1)	50	写真41	SD 11 出土遺物	53
写真38	SD 8 出土遺物 (2)	51	写真42	A-3 試掘区 V c 層出土遺物	54
写真39	SD 8 出土遺物 (3)	52	写真43	その他の出土遺物	55

第1章 はじめに

第1節 調査要項

遺跡名：安久遺跡（仙台市文化財登録番号C-140、宮城県遺跡登録番号01106）

調査名：安久遺跡第3次発掘調査

所在地：仙台市太白区西中田五丁目7番8

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査第二係 担当職員 平間亮輔 伊藤孝行

調査期間：試掘調査 1995（平成7）年11月8日～11月10日

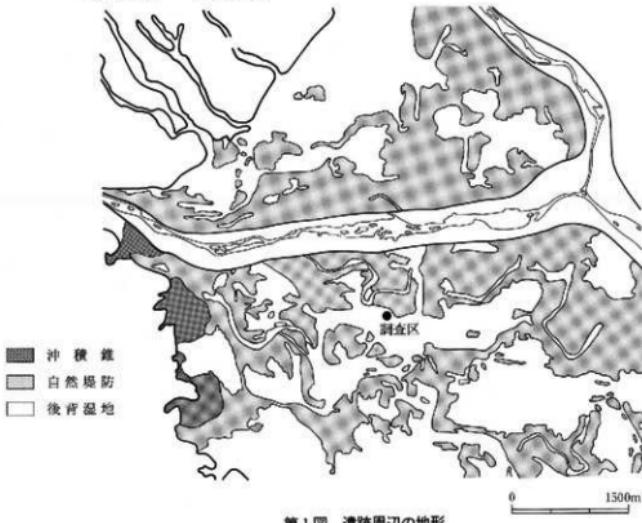
：本調査 1996（平成8）年7月22日～9月11日

調査対象面積：782m²

調査面積：707m²

調査協力：柳沼一夫、株式会社大京

発掘調査参加者：青木 吉次	浅見 禮子	阿部みのる	入間川きみ	伊藤 清子	遠藤いな子
大沼みさほ	小畠 和子	加嶋みえ子	工藤きく子	佐藤とき子	佐野たみえ
庄子 弘子	鈴木 いし	須賀 栄子	菅井 清子	菅井きみ子	菅井美枝子
背谷 裕子	高橋たづよ	竹森 光子	田中さと子	棕沢 純子	早坂みつえ
福山 幸子	本郷 正	山田千代子	三浦つよの	渡辺 洋子	
整理作業参加者：相沢美佐子	熊谷きぬ子	斎藤喜恵子	佐藤よし子	零石 良子	高橋 弘子
横山美代子	渡辺まき子				



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 周辺の遺跡 (1/50000)

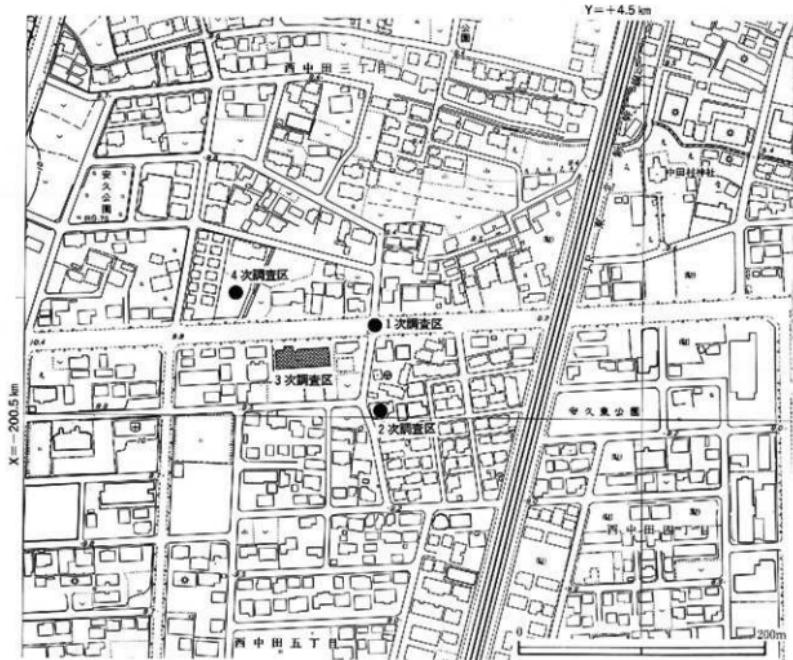
1 北前進跡	黒瀬跡	段丘	旧石器・縄文・吉備・平安	28 猿野原神社	知社跡	丘陵中和	中世・近世
2 山田上・右近跡	無落跡	段丘	彌山跡・縄文・平安・近世	29 大船山遺跡	妙斷跡	丘陵	中世
3 山田鳥居跡	鳥居跡	段丘	縄文・平安・古墳	30 上野遺跡	佐古地	台地	縄文(中)・奈良・平安
4 上野遺跡	鳥居跡	段丘	縄文・平安	31 佐島越跡	城館跡	丘陵	中世
5 新野前進跡	包含地		自然堤防	32 川上遺跡	包含地	冲積地	縄文・奈良・飛鳥～平安
6 三重前進跡	無落跡	段丘	縄文	33 志等寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文
7 土手内進跡	段跡	古墳	無落跡	34 小野舟渡跡	貝塚跡	丘陵	縄文・弥生～平安
8 高須遺跡	水田跡	後行窪地	旧石器～近世	35 高作道跡	佐今町	冲積地	弥生～平安
9 山口遺跡	無落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安	36 東馬道跡	高木地	自然堤防	奈良～平安
10 下ノ内進跡	佐古地	自然堤防	縄文・弥生・平安	37 松木城跡	無落跡	自然堤防	平安～近世
11 下ノ内進跡	無落跡	自然堤防	縄文・弥生・平安	38 開道跡	佐古地	自然堤防	古墳・奈良・平安
12 萩原跡		自然堤防	古墳～平安	39 桂台古墳遺跡	包含地	自然堤防	古墳・古代
13 无便溝跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	40 佐道跡	佐多跡	自然堤防	弥生～平安
14 大野山遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(後期)・弥生	41 安久道跡	秦原跡	自然堤防	奈良～平安
15 六沢川遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・平安	42 安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	古墳・奈良～平安・中世
16 佐吉田遺跡	包含地	自然堤防	縄文・古墳・平安	43 中田坪山遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
17 大野口古墳群	古墳群跡	自然堤防	古墳・平安	44 新田道跡	段跡	自然堤防	中世
18 王ノ坂遺跡	古墳・無落跡生	自然堤防	古墳～中世	45 地輪遺跡	佐古地	自然堤防	奈良～平安
19 西台遺跡	無落跡	自然堤防	縄文(後期)・弥生・古墳	46 清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
20 長町東北遺跡	包含地	自然堤防	無落跡	47 高野遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
21 猿山遺跡	吉備跡・水田耕耙	积水盆地	発生～奈良	48 中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
22 北長坂跡	段跡	自然堤防	室町・奈良	49 中田南遺跡	高落跡・段跡	自然堤防	奈良～平安
23 口辺遺跡	段跡	冲積地	室町	50 上白合遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
24 鳥井安佐遺跡	段跡	中世		51 武昌道跡	佐今町	自然堤防	古墳・平安
25 馬崎古跡	段跡	中世		52 後円廻路跡	水出跡	自然堤防	奈良～平安
26 小蛇(古蛇)跡	段跡	中世		53 中田切古墳跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
27 高萩城跡	段跡	中世		54 鳥居(大穴)古墳	円墳	自然堤防	古墳
				55 戸ノ内遺跡	佐多跡・筑跡	自然堤防	古墳・平安・中世
				56 西久太郎跡	向井墓・古墳・城跡	自然堤防	古墳・平安・中世・近世
				57 下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安

表1 周辺の遺跡地名表

第2節 遺跡の概要

安久遺跡は、JR南仙台駅の西側、仙台市太白区西中田二丁目と五丁目に位置する。名取川と広瀬川の合流点から約2.5km上流、名取川南岸0.8kmの地点にある。地形的には、名取川の旧河道とそれによって形成された自然堤防と後背湿地が複雑に入り組んだところに立地している。

名取川流域は、宮城県内で最も多くの遺跡があることで知られている。名取川下流域南岸の旧石器時代の遺跡としては、高籠丘陵の台地上に立地する西野田遺跡のみであるが、台地を中心人々の活動の痕跡が確認される。今後さらにこの時代の遺跡の増加が期待できるであろう。縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡がよく知られており、前期の堅穴住居跡が71件も発見されており、大規模な集落が形成されていたことがわかる。弥生時代になると、縄文時代では遺跡の極めて少なかった南岸部の低地にも遺跡が点々と分布している。古墳時代になると遺跡の数が増加し、自然堤防から浜堤まで遺跡の分布が広がり、隣接する安久東遺跡、戸ノ内遺跡、四郎丸跡などからは前期の堅穴住居跡や方形周溝墓が検出されており、政治的な社会が形成されてきたことを示している。また、7世紀後半になると、陸奥国の設置とともに名取郡が置かれたものと考えられている。奈良・平安時代になると、清水遺跡や中田南遺跡などで集落の拡大が認められており、本遺跡や、安久東遺跡、中田畠中遺跡などでも集落跡が検出されているなど増加を示している。中世になると、高籠丘陵に山城が、低地には安久東遺跡、前田遺跡、中田南遺跡、



第3図 調査区位置図

四郎丸館跡などの城館、居館が数多く造営される。近世になると、仙台城下町は広瀬川北岸の河岸段丘上を中心に建設され、そのころの名取川下流域は大半が農村地帯となるが、奥州街道の整備に伴い中田に宿場町が作られる。

以上のように、本遺跡周辺地域には旧石器時代から現代に至るまで連続と人々の生活の痕跡が残されている。

次数	所在地	調査期間	調査面積	調査概要（主な発見遺構）	文献
1次	西中田二丁目・五丁目 (県道岩沼・仙台線)	S50.2.3～S50.3.31	約3000m ²	古墳時代末期の古墳、溝跡 平安時代の夥穴住居跡、土坑	伊東他1975
2次	西中田五丁目6-34	H4.6.9～H4.6.10	45m ²	夥穴住居跡	木村 1993
3次	西中田五丁目7-6	H4.7.22～H4.9.11	707m ²	古代～近世の溝跡	木村
4次	西中田三丁目2-6	H4.12.12～H4.12.18	85m ²	平安時代の夥穴住居跡	竹田 1997

表2 安久遺跡調査次数表

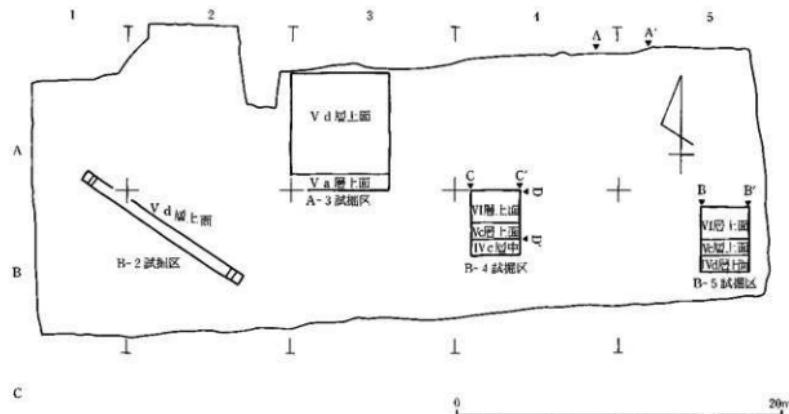
第3節 調査方法

1. 調査区の設定

今回の調査地点は安久遺跡範囲のはば中央の地点にあり、畠として利用されていた。共同住宅建設によって掘削を受ける782m²のうち707m²に調査区を設定した。調査区には、平面直角座標系Xに乗せて基準杭を打ち10mグリッドを設定した。グリッドの名称は、東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組み合わせで表した。また、グリッド交点の名称は、交点の南東側のグリッドの名称で示した。

2. 調査方法

調査は、I・II層を重機で除去し、III層上面から精査を行った。III層は西端部の一部しか残存せず遺構が検出できなかったため、IV層上面まで除去し精査を行った。この時点で溝11条、ピット26基を確認した。調査中、遺構の平面図は基準杭によって簡易通り方を組み、縮尺1/40で作成した。土層断面図・エレベーション図は縮尺1/20を用いた。その後、それよりも古い時期の文化層の確認を行うため4ヶ所に試掘区を設け、平面的な調査を行うことにした。



第4図 調査区設定図

第4節 基本層序

基本層序は大別して6層が確認された。IV a層上面が遺構確認面である。

第I層：表土。6層に細分される。I a層～I c層は全体に分布し、I d層～I f層は南西部のみに分布、I f層からビニールひもが出土している。

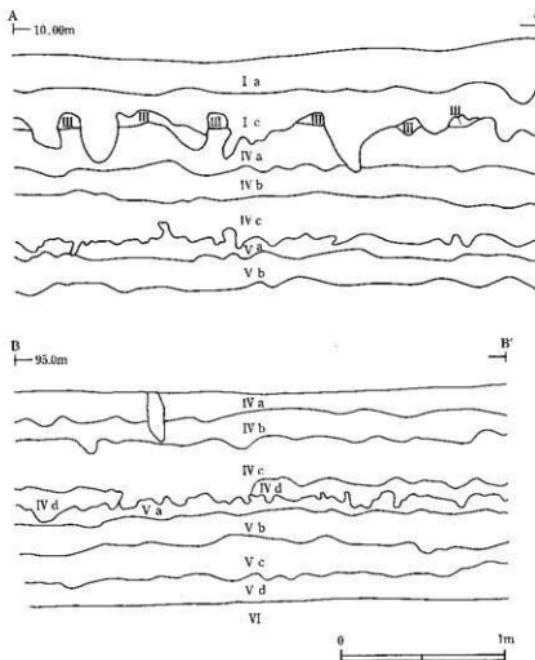
第II層：耕作土。西端部のみで確認され、厚さ30cm前後である。10YR4/2灰黄褐色シルトで、にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含んでいる。

第III層：大部分がI c層の搅拌を受けていて、下部の一部しか存在せず、厚さは平均7cmである。10YR3/1黒褐色粘土質シルトである。

第IV層：褐色系の層をIV層とし、それを4層に細分した。調査区全てに分布している。

遺構確認面のIV a層は、厚さ20～30cmで、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトで、10YR3/2黒褐色粘土粒子を微量に含む。

IV b層は、厚さ20cm前後で、10YR3/3暗褐色粘土質シルトで、10YR4/2灰黄褐色シルトブロックを少量、



第5図 基本層序（地点は第4図参照）

木炭粒を微量含む。

IV c 層は、厚さ30cm前後で、10YR3/3 暗褐色粘土質シルトで、10YR4/2 灰黄褐色シルトブロックを多量、下部はIV d 層あるいはV a 層ブロックを少量含む。

IV d 層は、厚さ20cm前後で、10YR4/4 褐色砂質シルトで暗褐色粘土ブロックを少量含む。

IV c 層とIV d 層の下部の凹凸が激しく耕作土の可能性が考えられ、B-5 試掘区でIV層のプランツ・オパール分析のための土壤を採取した。

第V層：黒褐色系の層をV層とし、そこから4層に細分した。調査区全てに分布している。

V a 層は、厚さ20cm前後で、10YR3/1 黒褐色粘土で、V b 層ブロックを少量含み、耕作土の可能性が考えられる。

V b 層は、厚さ平均30cmで、V a 層よりやや薄めの10YR3/2 黑褐色粘土である。B-5 試掘区で、磨滅しているため詳しく述べられないが、縄文土器が出土している。

V c 層は、厚さ平均20cmで、10YR3/3 暗褐色粘土で酸化鉄を斑紋状に少量含む。A-3 試掘区で縄文土器・石器が出土している。

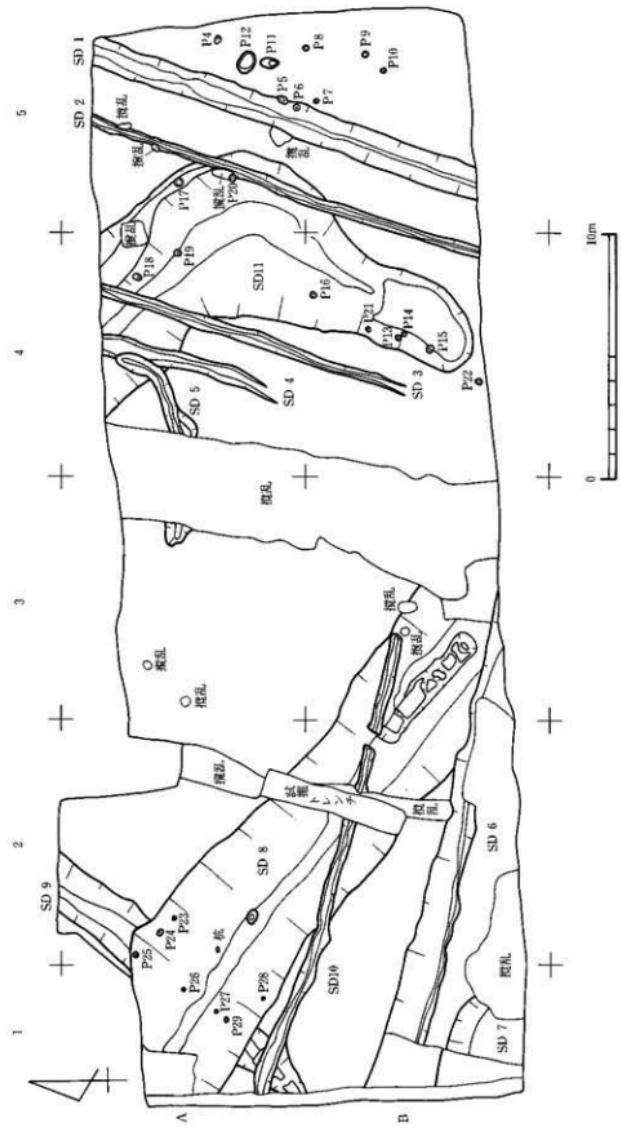
V d 層は、厚さ20cm前後で、2.5Y3/1 黑褐色粘土である。

V層もIV層同様プランツ・オパール分析のため土壤を採取した。

第VI層：B-4、B-5 試掘区でVI層上面まで掘り下げた。10YR4/2 灰黄褐色粘土で砂粒を少量含む。



SD8 調査風景



第6図 遺構全体図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 遺構の検出状況と概要

I・II層を重機によって除去し、III層から調査しようとしたが、III層は西端部の一部しか存在せず、遺構が検出できなかつたため人力によってIVa層上面まで除去した。Ic層（現代の耕作土）によりIVa層上面まで搅拌されていることから、検出された遺構はIVa層から掘り込まれた遺構だけではなく、それよりも上の層から掘り込まれた遺構もあると推定される。

ここでは、切り合いなどから判断し、新しい遺構（中世及び近世）を第2節に、それより古い遺構（古代及び中世）を第3節に分けてまとめた。

第2節 IVa層の遺構と遺物（1）

SD 1

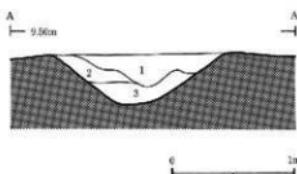
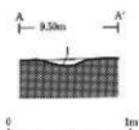
調査区東端部A・B-5グリッドにかけて検出された。方向はN-22°-Eである。上端幅は130cm前後、下端幅は12~57cm、深さは約60cmで、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面から緩やかに立ち上がり、外方に大きく開いている。確認された堆積土は3層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物はほとんどが磨滅しており図示できるものはないが、ロクロ調整の土器の壺・甕、須恵器の壺・瓶、赤焼土器、陶器（相馬）などが出土している。

SD 1~4がほぼ平行し、SD10と直交することから、これらは何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

SD 2

調査区東部A・B-5グリッドにかけて検出された。SD11と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向はN-20°-E

である。上端幅は50cm前後、下端幅は約15cm、重機と人力によりIVa層中まで掘りすぎたため確認した深さは5cmであるが、断面観察によると約15cmである。断面形は皿状をしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土は1層のみである。出土遺物はない。SD1同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。



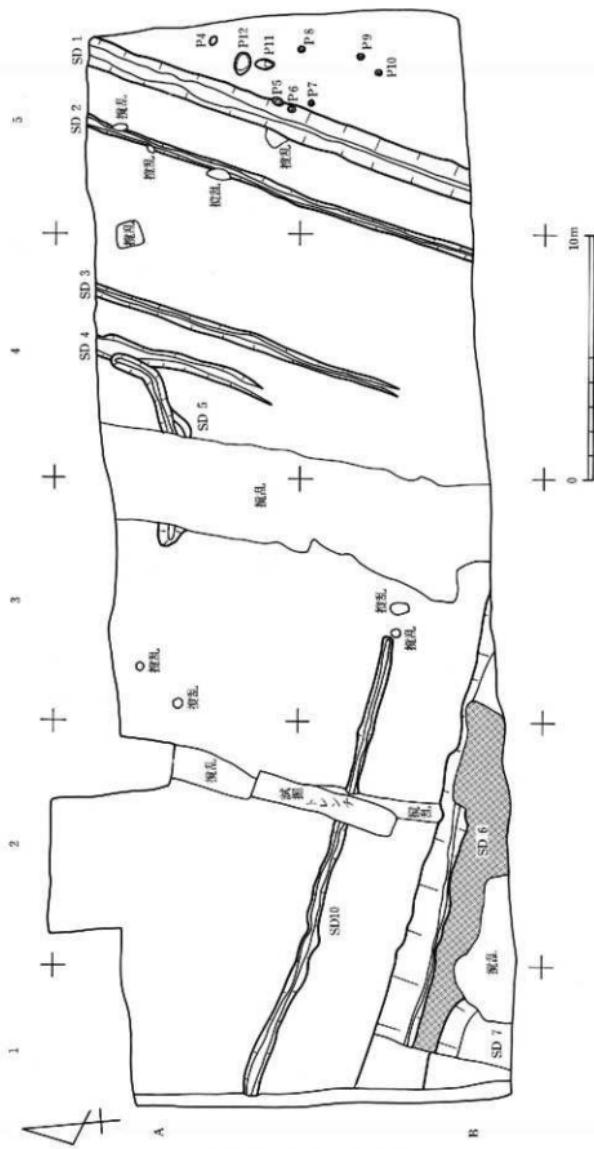
第7図 SD1断面図



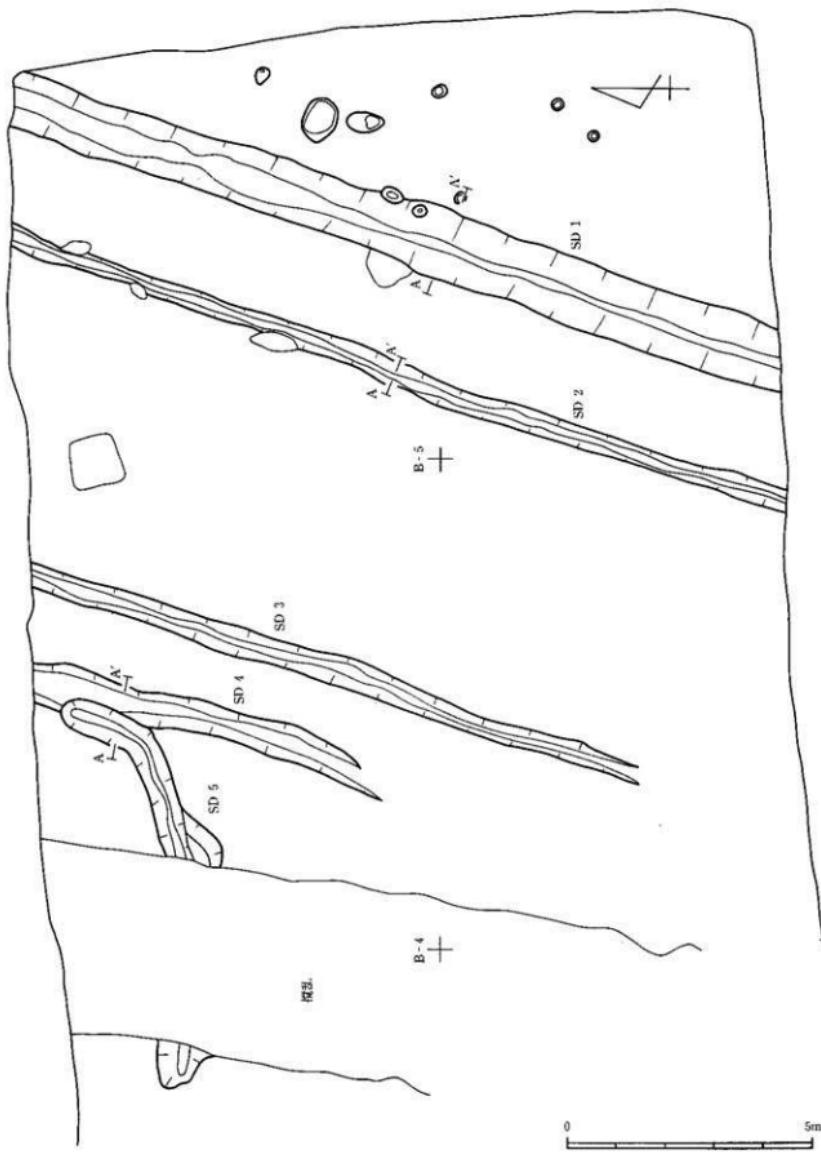
SD 1・2 調査風景

層位	色	調	性質	備	考
1	10YR4/2 黄褐色	レルト	熟化土を斑状に少量含む。本実験を被覆に含む。		

第8図 SD2断面図



第9図 IVa層上面全体図（1）



第10図 SD 1～5 平面図

SD 3

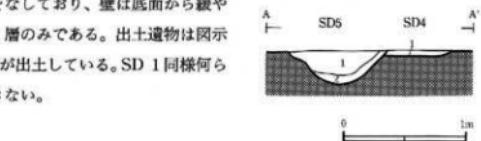
調査区東部 A-B-4 グリッドにかけて検出された。SD11 と重複関係にあり、切っていることから本遺構が新しい。方向は N-22°-E である。上端幅は 60cm 前後、下端幅は 10~30cm、深さは 1~2cm である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土は SD 4 と同じで 1 層からなる。深さ 1~2cm のため、断面図は作成していない。出土遺物はない。SD 1 同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

SD 4

調査区東部 A-4 グリッドにかけて検出された。SD 5+11 と重複関係にあり、SD 5 に切られ SD11 を切っていることから、本遺構は SD 5 より古く、SD11 より新しい。方向は N-18°-E である。上端幅は 60~100cm、下端幅は 20~80cm、深さは 5cm である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。確認された堆積土は 1 層のみである。出土遺物は図示できるものはないが、クロロ調整の土師器の壺が出土している。SD 1 同様何らかの区画に関わる溝と推定されるが断定はできない。

SD 5

調査区中央部 A-3・4 グリッドにかけて検出された。SD 4 と SD11 と重複関係にあり、ともに切っていることから本遺構が新しい。方向は N-72°-E である。上端幅は 60cm 前後、下端幅は 10~20cm、深さ 27cm であり、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。



SD4				
部位	色 調	傳 積	層	考
1	10YR 4/2 黄褐色	シルト	10YR 4/4 に近い黄褐色沙質シルト	をブロック状に少量含む。

SD5				
部位	色 調	傳 積	層	考
1	10YR 4/2 黄褐色	軟土質シルト	2.5Y 3/2 黑褐色粘土	をブロック状に少量含む。
2	10YR 4/2 黄褐色	粘土質シルト		

第11図 SD4・5 断面図

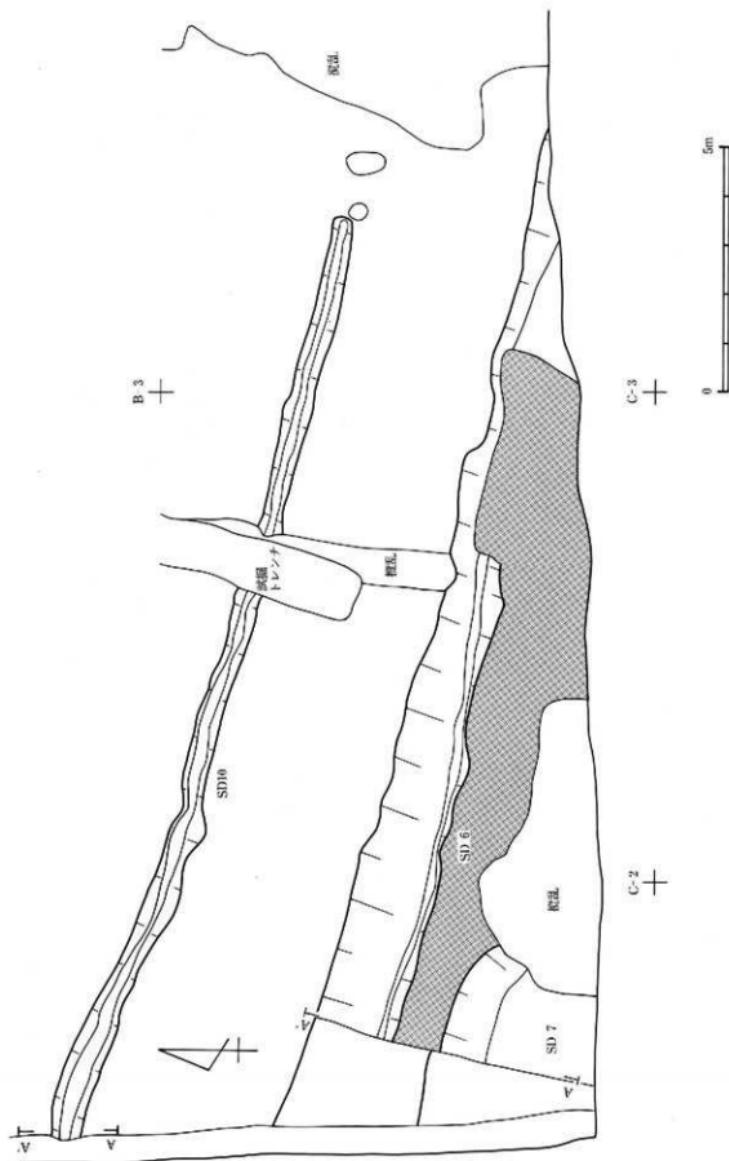
断面形は「U」字形を呈し、壁は底面から上部にかけて緩やかに大きく開く。確認された堆積土は 2 層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物は図示できるものはないが、クロロ調整の土師器の壺、小片のため年代は不明である陶器が出土している。両端が徐々に浅くなりそれ以上確認できなかったため、何のための溝かは不明である。

SD 6

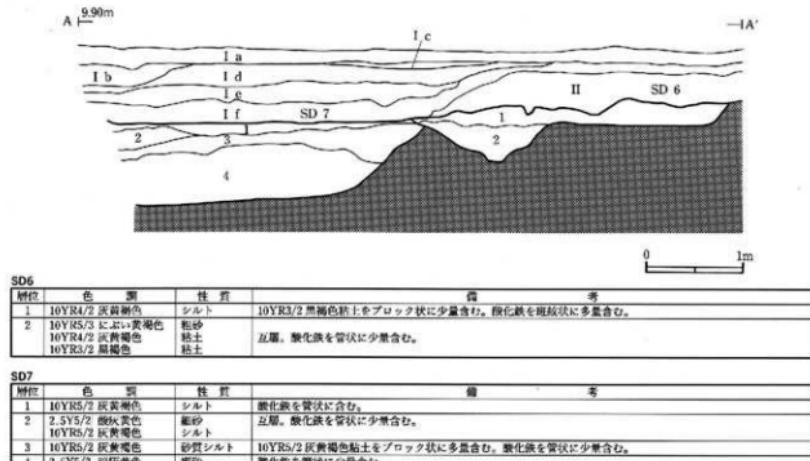
調査区南西部 B-1・2・3 グリッドにかけて検出された。SD 7 と SD 8 と重複関係にあり、ともに切っていることから本遺構が新しい。方向は N-85°-W である。当初、SD 7 と同遺構と考え掘り進めたが、後に下層の堆積土の違いや断面観察によって違う遺構であると判断した。なお、南側の上端が掘りすぎにより破壊された（第12図アミ点部分）ために明確ではないが、断面で確認すると上端幅は 268cm、下端幅は約 10cm、深さ 61cm である。断面形は、下部は「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がり、上部北側は段状になっている。確認された堆積土は 2 層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物のうち、図示できたのが上層から出土したクロロ調整後ナデが施された土師質土器（第14図、写真36）である。他に磨滅のため図示できなかったが、クロロ調整の土師器の壺や甕、須恵器の甕、小片のため年代が不明である陶器、銅鏡などが出土している。なお、第13図の第1層は本遺構の堆積土ではなく、II 層の墳の耕作によって攪拌された基本層の可能性も考えられる。底面のレベルは調査区内ではほとんど高低差はないが、下層は粗砂と粘土の互層になっていることから水路の可能性が高く、周辺の地形から考えて西から東へ流れていたと推測される。

SD 7

調査区南西部 B-1 グリッドで検出された。SD 6 と重複関係にあり、切られていることから本遺構が古い。方向は N-49°-W と推定される。ほとんどが調査区外に及び、また、東部は搅乱により破壊されているため実際の規模は不明であるが、確認した規模は、上端幅は 337cm、下端幅は 189cm、深さは 100cm 前後である。断面形は船底形をなし

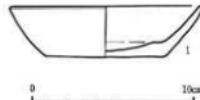


第12図 SD 6・7・10平面図



第13図 SD6・7断面図

ており、広い底面から緩やかに立ち上がる。確認された堆積土は4層で、いずれも自然堆積層である。出土遺物はない。検出された長さは短く、高低差は不明であるが、下層に砂が厚く堆積していることから大きな水路の可能性が考えられる。



No.	草原頭	遺構・層位	種別	器種	深厚度	法量(cm)	底径	色調	特徴
1	36	SD6 / I	土師質土器	小皿	3/4	12.0	7.5	3.3	— に近い黄褐色 (内・外) ロクロ調整後ナメ

第14図 SD6出土遺物

SD10

調査区西部A-1、B-2・3グリッドにかけて検出された。SD8とSD9と重複関係にあり、切っていることから本遺構はそれより新しい。方向はN-76°Wである。上端幅は50~70cm、下端幅は10~30cm、深さは20cm前後であり、底面はやや凹凸があるが比較的平坦である。断面形は「U」字形に近く、底面は皿状をなし、壁はそこから緩やかに屈曲して立ち上がっている。確認された堆積土は1層のみである。出土遺物は、ほとんど磨滅していく様子はないが、底部の切り離しは回転糸切りで再調整はされていない土師器の环、ロクロ調整の土師器の甕、須恵器の瓶、

土師質土器が出土している。SD1同様、何らかの区画

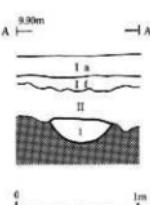
に関わる溝と推定されるが断定はできない。

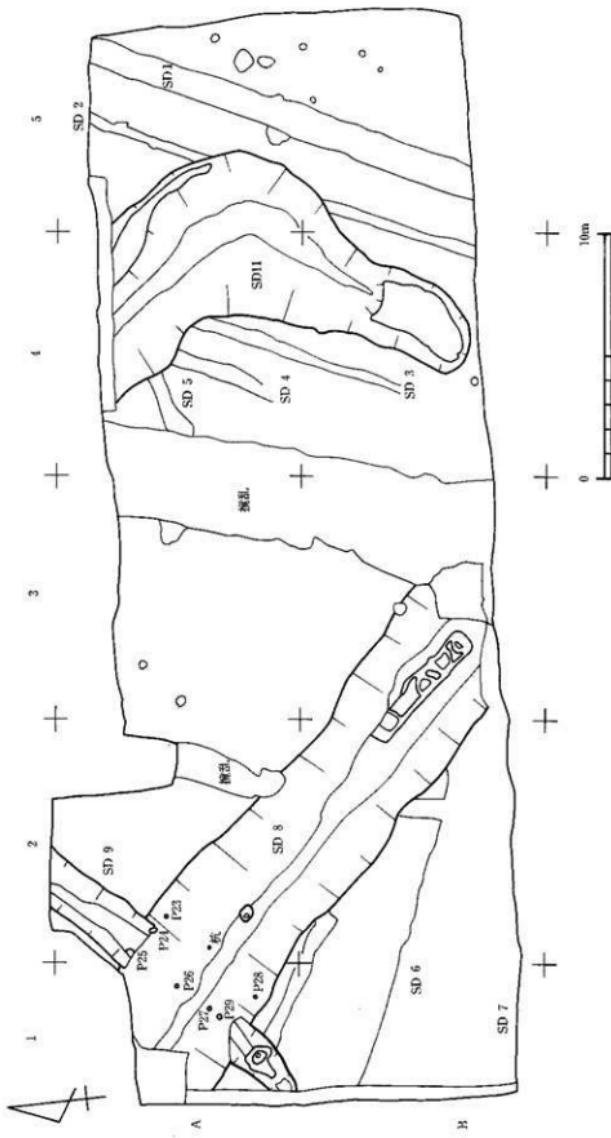
ピット

調査区東部に集中し22基検出された。P10から磨滅しているため判断しにくいか、土師器壺の小片が1点出土している。いずれも組み合わず、柱痕跡も見つからなかったことから、柱穴ではないと考えられるが、性格は不明である。

部位	色調	性質	備考
1	10YR4/2 黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に多量含む。

第15図 SD10断面図





第16図 IVa層上面全体図（2）

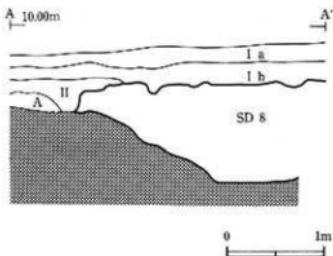
第3節 IVa層の遺構と遺物（2）

SD8

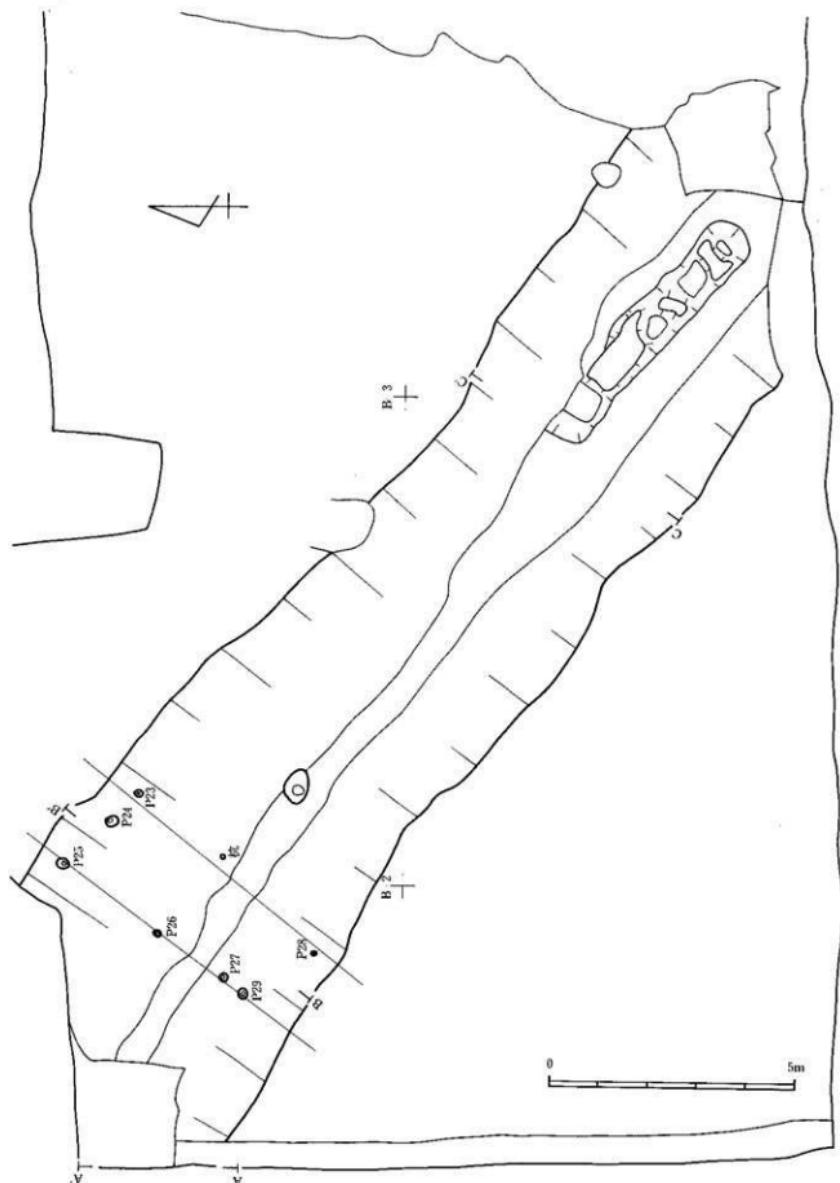
調査区西部 A-1、B-1・2 グリッドにかけて検出された。SD 6、SD 9、SD10 と重複関係にあり、SD 9 を切り、SD 6 と SD10 に切られていることから、本遺構は、SD 9 より新しく、SD 6 と SD10 より古い。なお、断面図（1）に示した A 層は基本層ではなく、SD 8 を掘り込んだときの盛土と考えられる。方向は N-49°-W である。上端幅は 600cm 前後、下端幅は、調査区西側では 70cm 前後、調査区東側では 210~230cm、深さは 160~200cm である。底面は調査区西側はやや凹凸があるが比較的平坦である。調査区東側は底面が広く、長さ 560cm 前後、幅 100cm 前後の範囲で、底面より深さ 15cm 前後の窪みが連続してみられた。断面形は、西側で「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がり、東側は逆台形状をなしており、壁は底面からやや急な立ち上がりをしている。調査区西側で橋脚跡と見られるビット 7 基、木の杭 1 本が検出された。P23 は径 15cm・深さ 26cm・堆積土 10YR3/2 黒褐色粘土で、ぶい黄褐色シルトブロックを含む。P24 は径 28cm・深さ 49cm・堆積土は P23 と同じである。P25 は径 27cm・深さ 24cm・堆積土は P23 と同じである。P26 は径 14cm・深さ 27cm・堆積土は 10YR2/1 黒色粘土で杭の痕跡が見られた。P27 は径 18cm・深さ 41cm・堆積土は 2.5Y3/1 黑褐色粘土で砂粒を多量に含み杭の痕跡が見られた。P28 は径 10cm・深さ 29cm・堆積土は P23 と同じである。P29 は径 20cm・深さ 42cm・堆積土は 2.5Y3/2 黑褐色粘土である。木の杭は径約 9cm・遺存長 50cm であった。ビットの各間隔は P25~26 が 230cm、P26~27 が 160cm、P27~P29 が 60cm、P23~木杭が 220cm、木杭~P28 が 270cm、P25~P24 が 110cm、P24~P23 が 90cm、P26~木杭が 200cm である。実際はもっと多くの杭が使われていたと推測されるが検出はできなかった。堆積土は調査区の東部と西部では異なっているが、自然堆積層で、レンズ状の堆積状況を示している。出土遺物は、ほとんどが最下層から出土している。図示できたのが上層からロクロ調整の土師質土器、下層から龍泉窯系の青磁の皿、ロクロ調整の土師器の壺や壺、繩文土器深鉢、漆器の椀（写真22）、調査区東部から、外面はタタキ、内面はナデが施されている須恵器の壺や長頸瓶（第22・23図、写真37~39）である。他にも磨滅していて図示できなかったが、ロクロ調整の土師器の壺や壺、赤焼土器、ロクロ調整の土師質土器、須恵器の壺・壺・鉢、在地や東海地方産の陶器、瓦などが多数出土している。しかし、遺構に伴う遺物は確実に限定できず、大部分は混入品であると考えられる。なお、堆積土は下層が粘土と粗砂の互層になっており、水路として利用されていたと考えられる。底面のレベルは、調査区内ではほとんど高低差はないが、地形から判断して西から東へ流れていたと推測される。また、調査区東部の下層から長さ 50~150cm の河原石が多数出土した（写真23）。その河原石は、調査区から東へ 80m のところにある安久御訪古墳から出土している。



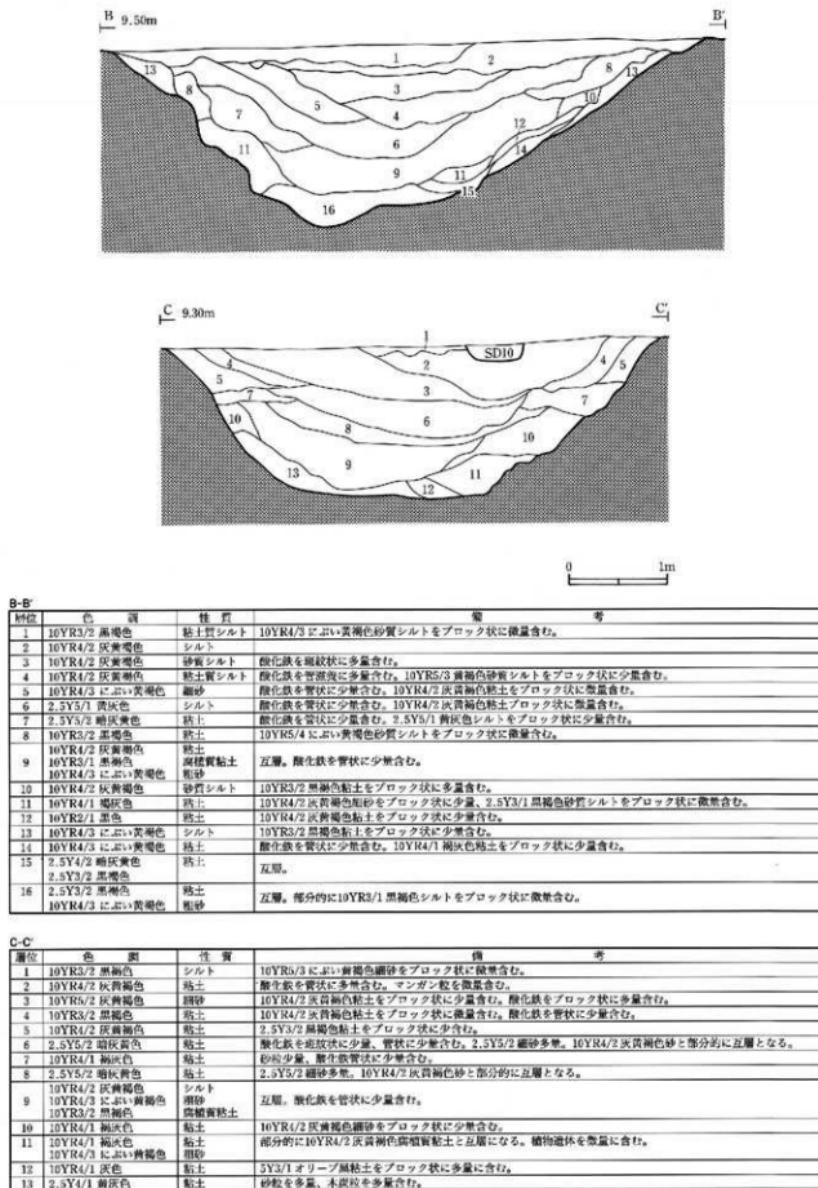
SD 8 調査風景



第17図 SD 8 断面図（1）

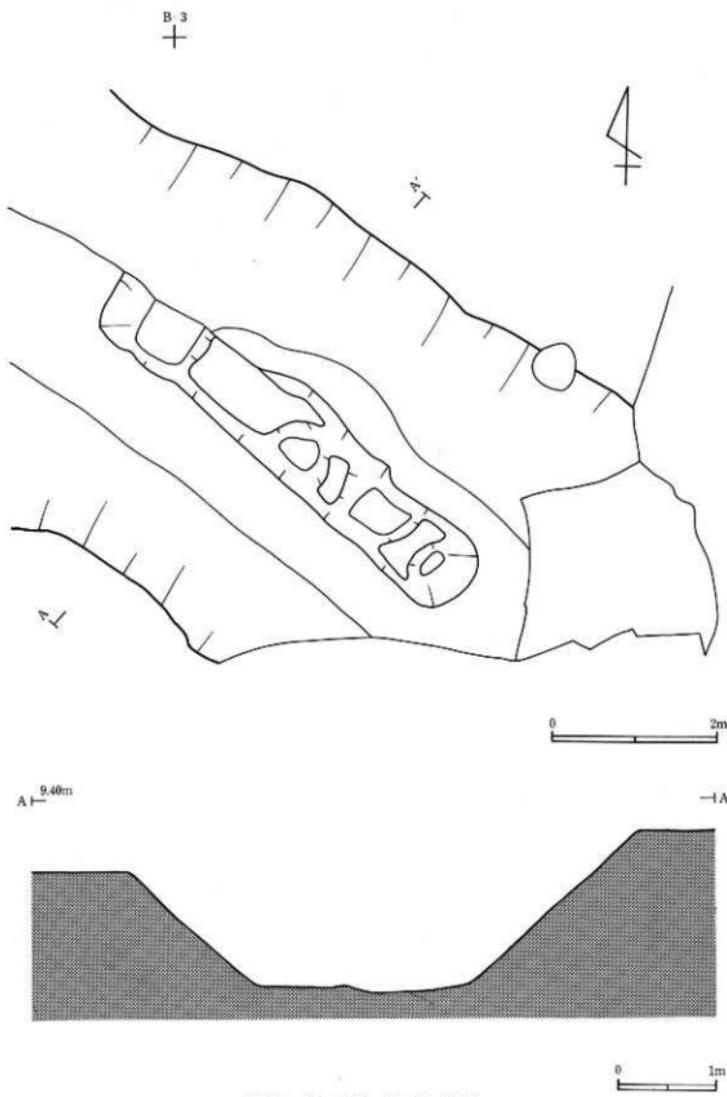


第18図 SD 8 平面図

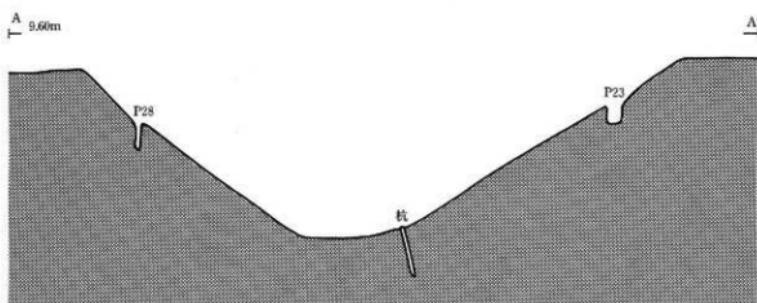
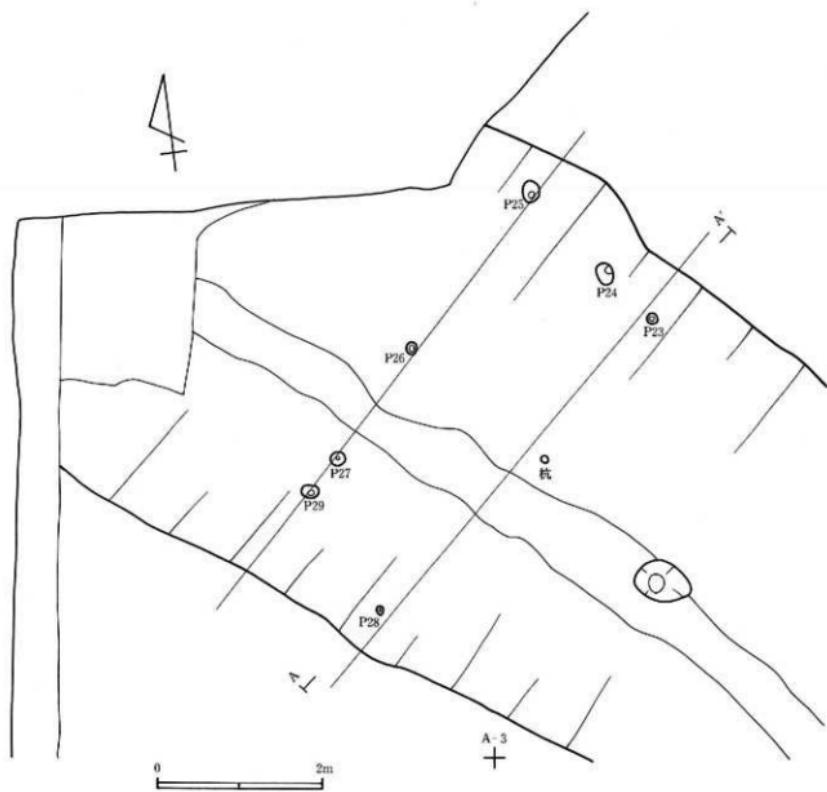


第19図 SD8 断面図（2）

る石室のものと同規模であることから、ここにも以前古墳があり、その石室が何らかの理由で破壊されて本遺構に混入した可能性も考えられる。なお、前述した須恵器の壺も河原石と同じところから集中して出土したことを考えると、古墳と何らかの関係があると推定される。

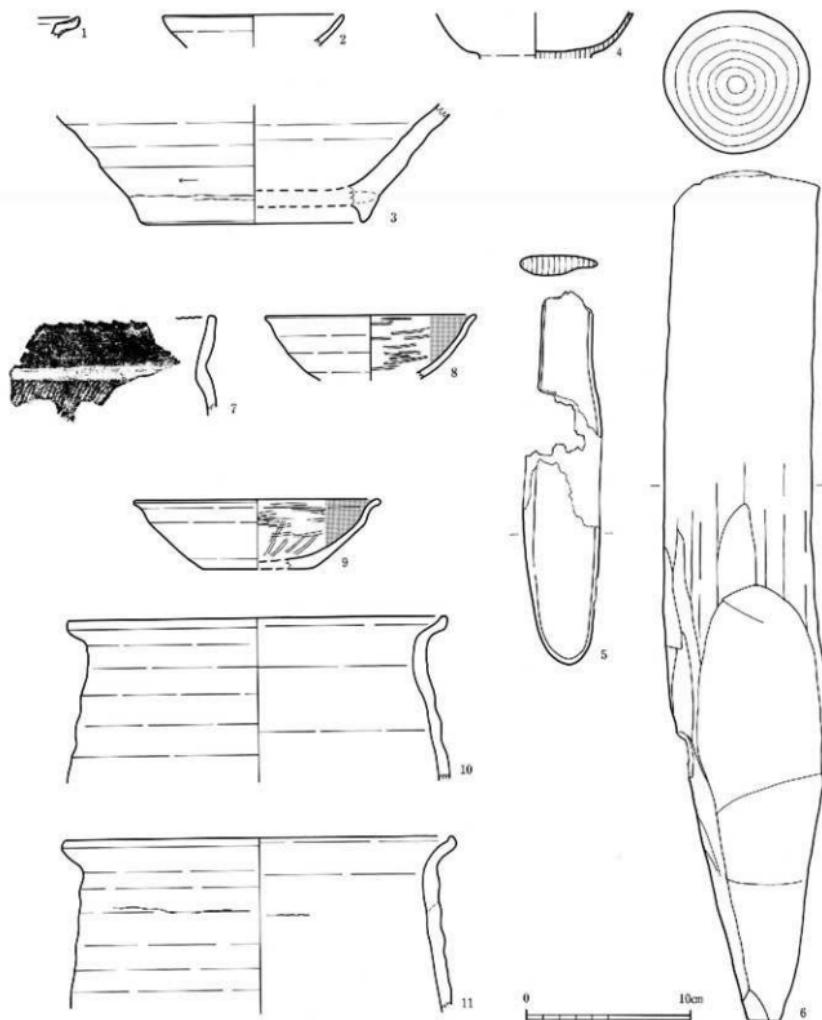


第20図 SD 8 平面・断面図（東部）



第21図 SD 8平面・断面図（橋脚部）

0 1m



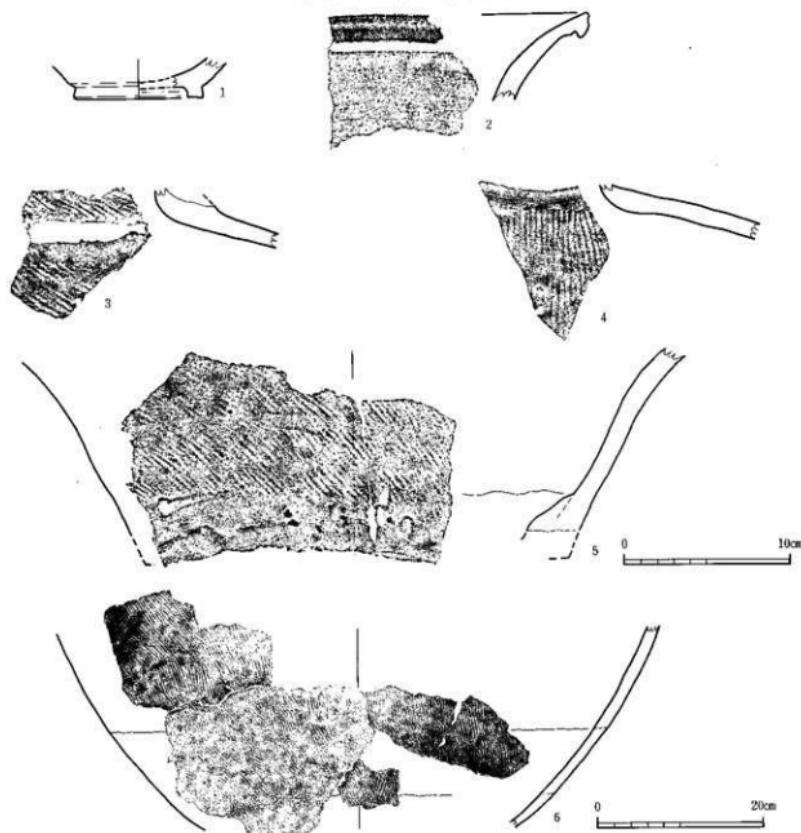
No.	写真回数	通 番・層 位	種 别	器 形	遺 存 度	法 量 (cm)	色 调	特 性
					11 存 在 度	底 高		
1	37-2	SD 8 下層	磁器(青磁)	三	口縁小片	?	?	?
2	37-1	SD 8 上層	土造質土器	小皿	体部上半1/6	(11.39)	?	?
3	37-3	SD 8 下層	磁器	鉢	底部 1/6	?	(13.4)	?
4	38-2	SD 8 下層	木製品	漆器・椀	体部下半遺存	?	(6.8)	?

No.	写真回数	通 番・層 位	種 別	遺 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特 性
5	37-4	SD 8 下层	木製品	用途不明	断端欠損	(25.9)	4.7	1.2	- ヘラ状
6	38-1	SD 8 既知	木製品	机	脚部欠損	(53.5)	径	8.8	- 美術のため

第3節 IVa層の遺構と遺物（2）

No.	写真回数	遺構・層位	種別	器種	保存状	法 基 口 幅 厚 底 径 深 度 高 さ 底 幅	基 底 厚 底 径 深 度 高 さ 底 幅	色 調	特 徴
7	39-1	SD 8 下層	縄文土器	深鉢	口端小片	?	?	?	灰褐色 (外)に赤い黄褐色 (内)黒色
8	38-4	SD 8 下層	土器器	杯	1/7	(12.8)	7	?	?(外)ロクロ調査 (内)黒色
9	38-3	SD 8 下層	土器器	杯	1/6	(15.0)	(6.4)	4.3	0.43 (外)に赤い黄褐色 (内)黒色
10	38-5	SD 8 下層	土器器	甌	1/5	(23.0)	?	?	- (外)に赤い黄褐色 (内)灰褐色
11	38-6	SD 8 下層	土器器	甌	2/5	(23.4)	?	?	(外)に赤い黄褐色 (内)に赤い黄褐色 (外)ロクロ調査、内面に炭化物付着

第22図 SD 8 出土遺物（1）

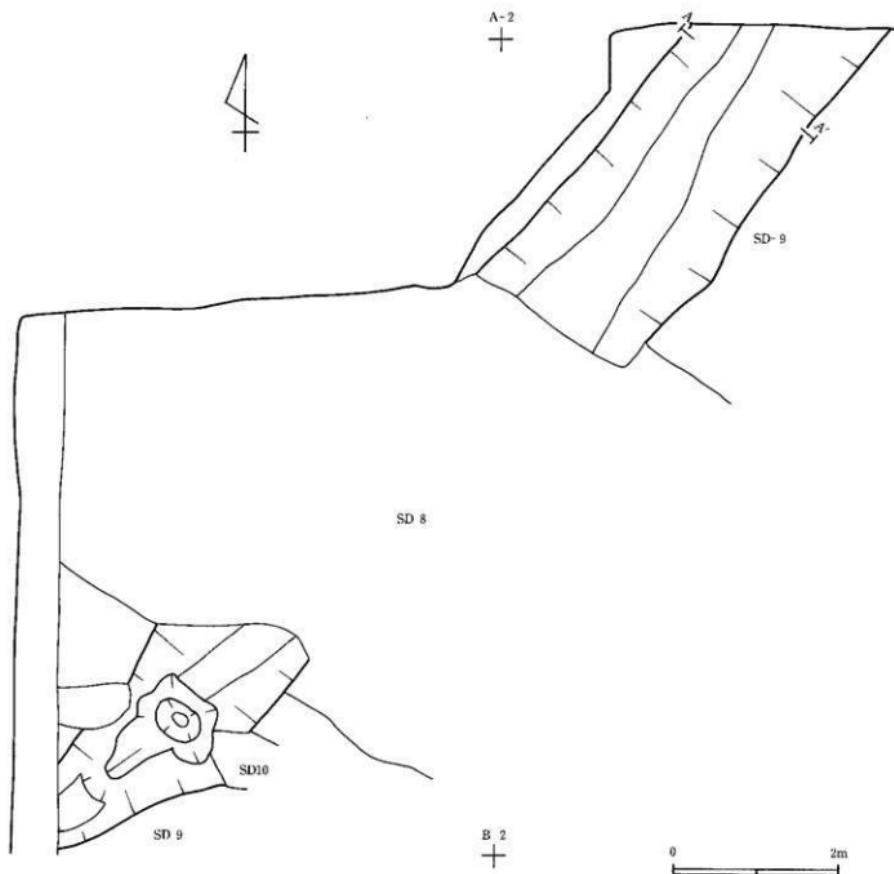


No.	写真回数	遺構・層位	種別	器種	保存状	法 基 口 幅 厚 底 径 深 度 高 さ 底 幅	基 底 厚 底 径 深 度 高 さ 底 幅	色 調	特 徴
1	39-2	SD 8 下層	縄文器	共頭瓶	底邊1/7	?	(7.8)	?	灰白色 (内・外)ロクロ調査、大口部K12窓式
2	39-3	SD 8 下層	縄文器	甌	口端小片	?	?	?	(外)輪状(内)灰白色 (内・外)ロクロ調査
3	39-5	SD 8 下層	縄文器	甌	口端小片	?	?	?	灰色 (外)タタキ、内側の剥離部 (内)ナデ
4	39-6	SD 8 下層	縄文器	甌	口端小片	?	?	?	灰色 (外)タタキ (内)ナデ
5	39-4	SD 8 下層	縄文器	甌	底邊1/4	?	?	?	灰色 (外)タタキ (内)ナデ
6	39-7	SD 8 下層	縄文器	甌	体部下半1/4	?	?	?	灰色 (外)タタキ (内)ナデ

第23図 SD 8 出土遺物（2）

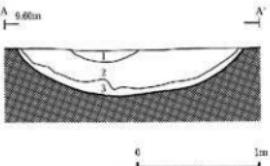
SD 9

調査区西部A-1・2グリッドにかけて検出された。SD 8とSD10と重複関係にあり、ともに切られれていることから、本遺構はそれより古い。方向はN-42°-Eである。上端幅は200cm前後、下端幅は40~80cm、深さ30cm前後である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から緩やかに外方に開いている。底面は比較的平坦であるが凹凸があり、調査区南側で20~30cmの土坑状の窪みが検出された。堆積土は3層確認され、いずれも自然堆積層であり、第1層に

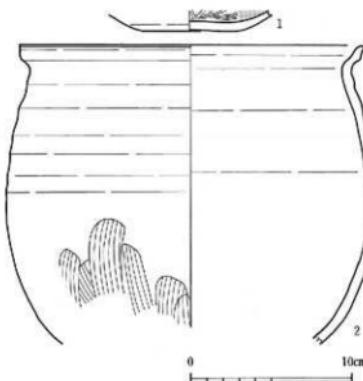


第24図 SD 9 平面図

灰白色火山灰のブロックを多量に含んでいる。出土遺物は、図示できたのが、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の壺、ロクロ調整後下半にヘラナデが施されている土師器の壺である(第26図、写真40)。他にも磨滅していくに示できなかつたがロクロ調整の土師器の壺、須恵器の瓶、磁器などが出土している。磁器については近世以降の遺物であり、造構に伴うものではなく、上層からの混入品であると考えられる。



第25図 SD9断面図



第26図 SD 9出土遺物

SD11

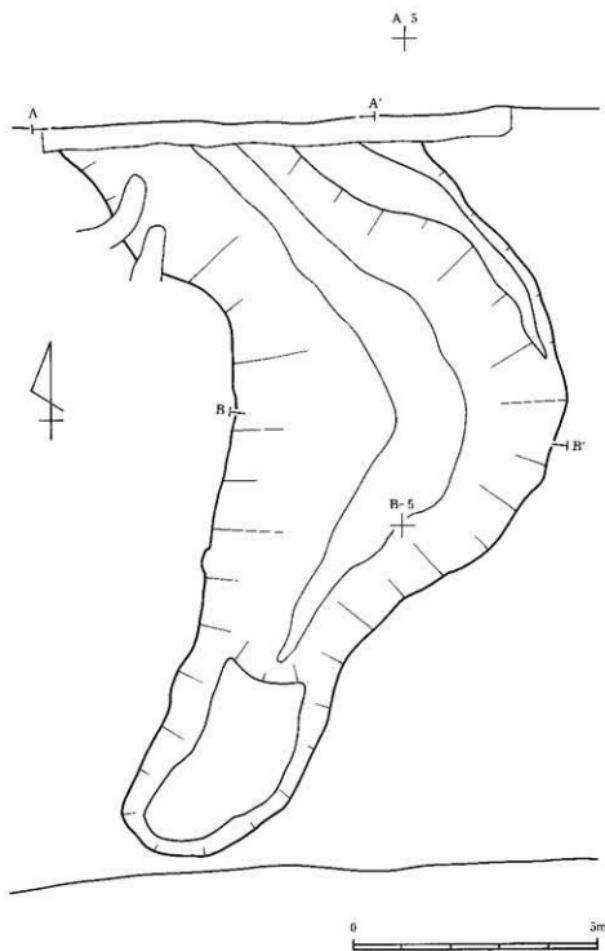
調査区東部 A-B-4・5 グリッドにかけて検出された。SD 2~5 と重複関係にあり、ともに切られていることから造構はそれより古い。上端の最大幅は 670 cm、下端の最大幅は 140 cm、深さ 65 cm であり、南北に延び東側にふくれる弧を描く溝である。断面形は皿状をなしており、壁は底面から外方に向かって開いている。確認された堆積土は 5 層で、いずれも自然堆積層であり、第 1 層に灰白色火山灰を層下部に層状に含んでいる。出土遺物は、図示できたのが、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の壺、ロクロ調整の土師器の壺、完形品の石鏡、釘である(第29図、写真41)。他にも土師器の壺や壺、須恵器の壺や

No	写真回数	遺構・層位	層別	基標	遺存度	法量 (cm)	底径	色調	特徴
					口径 底径 層高				
1	40-1	SD 9 / 1	土師器	壺	底部のみ	?	6.0	?	(外)にぶい黄褐色 (内)黒色 (外)ヘラミガキ・黒色処理
2	40-2	SD 9 / 1	土師器	壺	上半 1/3	(21.5) ?	?	-	(外)にぶい黄褐色 (内)灰褐色 (外)上半ロクロ調整、下半ロクロ後ヘラナデ (内)上半ロクロ調整、下半不明(磨滅)

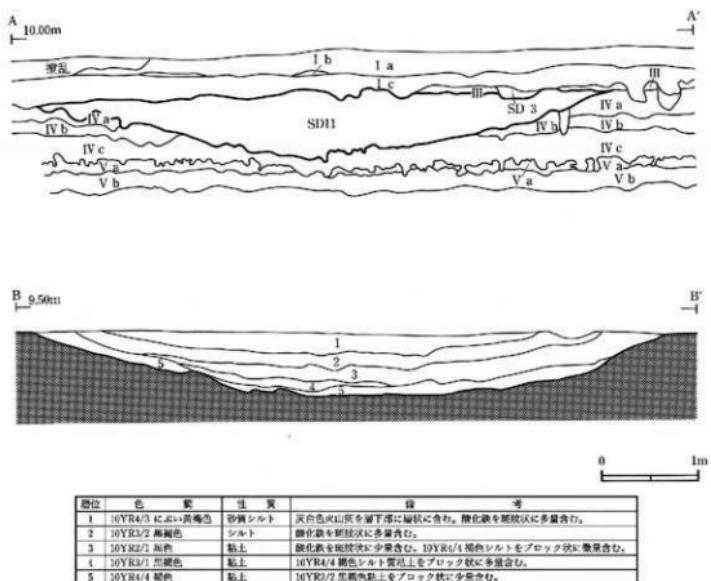


SD11 調査風景

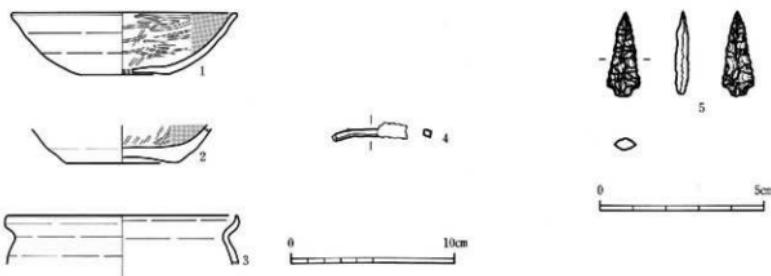
甕が出土している。石鐵については遺構に伴う遺物ではなく混入品と考えられる。南部で徐々に浅くなつて途切れ、それより南では確認できず、平面から見ても何のための溝かは不明である。



第27図 SD11 平面図



第28図 SD11 断面図



No.	写真図版	遺物・層位	種別	基種	遺存度	法量(cm)			色	特徴
						口径	底径	厚さ		
1	41-1	SD11 7/2	土師器	环	1/7	(13.8)	(3.4)	3.8	0.39	(外)に近い黄褐色 (内)黒色 (外)ハラミガキ・黑色燒痕
2	41-2	SD11 7/2	土師器	环	下部 2/3	?	8.8	?	?	(外)棕色 (内)黒色 (外)クロ糊點、底部一帯軽柔切削痕
3	41-4	SD11 7/2	土師器	器	上部 1/6	(14.0)	?	?	-	(外)に近い褐色 (内)に近い黄褐色 (外・内)ロクロ糊點

No.	写真図版	遺物・層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
4	41-3	SD11 7/1	骨製品、石	肉頭欠缺	(4.6)	0.5	0.4	3.7	
5	41-5	SD11 7/2	石器、石核	完形	2.6	1.0	0.4	0.8	有茎式

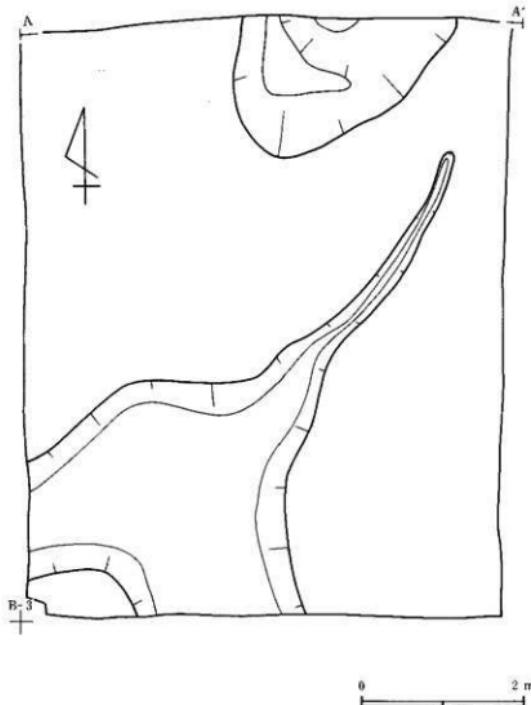
第29図 SD11 出土遺物

第4節 下層の調査

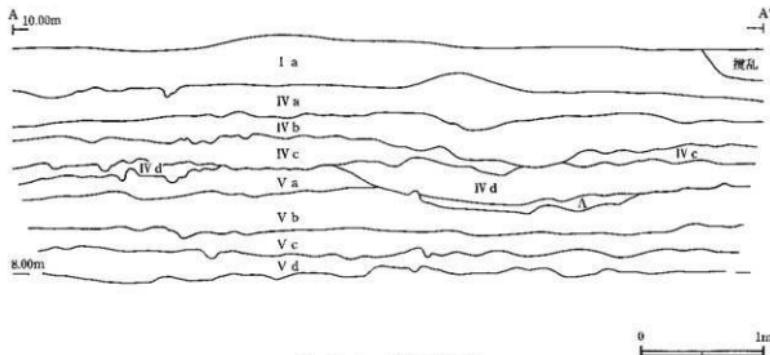
隣接する安久東遺跡の調査では古墳時代の層の下から弥生土器が出土している。このため、当遺跡でも下層の調査を実施することとし、IV a 層上面の調査終了後、A-3・B-4・B-5 グリッドに試掘区を設けて掘り下げた。

A-3 試掘区は、IV層中は遺構・遺物は検出されなかった。V a 層上面で土坑状の窪みと溝跡のプランが検出された。土坑状の窪みは深さ約30cmで、人为的なものか自然の窪みかは不明である。第31図の A 層はこの土坑状の窪みの堆積土である。溝跡は、北東部は上端幅約10cmであるが、南西部で広がりを見せて二股に分かれれる。深さは4~5cmである。B-2 試掘区を設けてこの溝の延び具合を確認しようとしたが検出できなかった。出土遺物はなく、人为的に掘り込まれた様子もないことから自然流路と考えられる。V c 層掘り下げ中、遺構は検出できなかったが、縄文土器片47点、石器1点が出土した。第32図1~3は深鉢と推定される。1は口縁部のやや下に横位沈線が通り、沈線より上部は丁寧なミガキが施されている。2・3は同一個体と推定される。横位平行沈線と縦位の弧状沈線によって区画され、区画内には縄文が充填されている。また上部の隆帯には連続する刻目が施され、2では隆帯のさらに上方に沈線が認められる。4は無文の浅鉢で、口縁部近くに円孔が穿たれている。5は深鉢の体部である。横位平行沈線と梢円形になると考えられる沈線によって区画され、上部の横位沈線と梢円形の沈線との間には三叉状の短沈線が刻まれている。区画内には縄文が充填され、三叉状の短沈線の上部には小さな丸瘤が張り付けられている。他、下部の横位沈線上にも刻み目が施された大型のボタン状の瘤が張り付けられている。また、この大型の瘤と瘤との間には刻目も認められた。6は石匙であり、長さ4.5cm、幅5.65cm、厚さ8.4cm、重さ14.1gである(第32図、写真41)。なお、その後V d 層上面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。

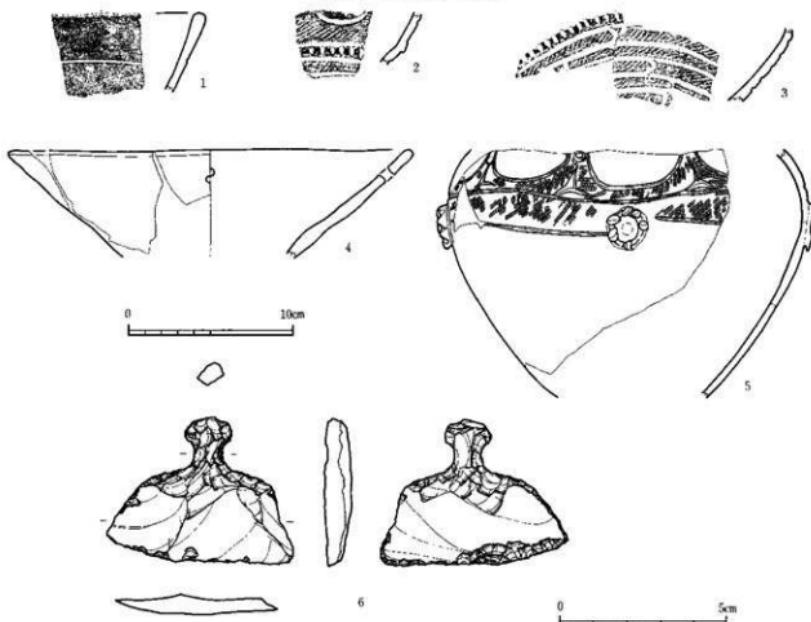
B-4 試掘区・B-5 試掘区でVI層上面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。断面観察をすると、IV c 層と IV d 層の下面の凹凸が激しく耕作土の可能性も考えられるため、B-5 試掘区でIV a 層~V d 層のプラント・オーパール分析を行ったが、イネのプラント・オーパールは検出されなかった(第3章参照)。B-5 試掘区 V b 層で遺構は検出できなかったが、磨滅しているため詳しく述べられないが縄文の施された土器片が20点出土した。



第30図 A-3 試掘区 V a 層上面平面図



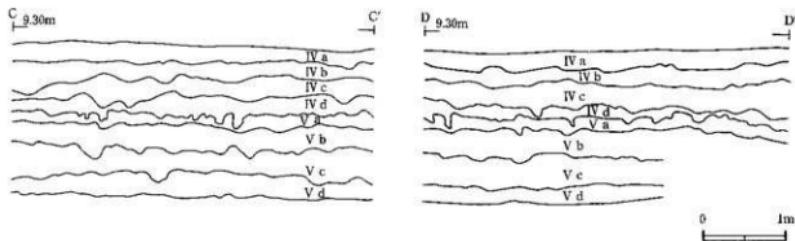
第31図 A-3 試掘区断面図



No.	写真図版	出土地点・層位	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	特徴
						II種	底深	高さ		
1	42-1	A-3 深掘区 VC層	陶文土器	深鉢	口縁小片	?	?	?	(外) 桃色 (内) 黒色	沈鉢
2	42-4	A-3 深掘区 VC層	陶文土器	深鉢	体部小片	?	?	?	(外) 桃色 (内) 黒褐色	沈鉢、底帯に漸減する同目
3	42-2	A-3 深掘区 VC層	陶文土器	深鉢	体部小片	?	?	?	黒褐色	沈鉢、底帯に漸減する同目
4	42-3	A-3 深掘区 VC層	陶文土器	深鉢	1/5 (24.0)	?	?	網状色	ヘラミガキ	
5	42-5	A-3 深掘区 VC層	陶文土器	深鉢	体部1/4	?	?	?	桃色～灰褐色	沈鉢、丸底、ボタン状瘤

No.	写真図版	出土地点・層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴
6	42-6	A-3 深掘区 VC層	石器・石器	完形	4.5	5.65	9.4	14.1	

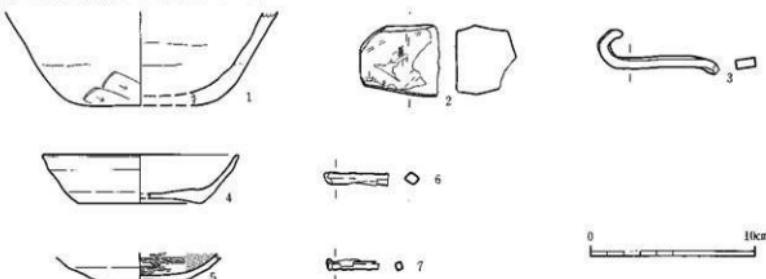
第32図 A-3 試掘区出土遺物 (VC層)



第33図 B-4 試掘区断面図（第4図参照）

第5節 その他の出土遺物

I・II層の遺物については、I・II層の大部分を重機で除去したため取り上げた遺物はごく一部であると考えられる。出土層位もI・II層を厳密に区別しなかったため、平面的・層別の分布状況は不明である。出土遺物は、図示できたのが外面は磨滅しているが一部ヘラケズリで内面はナデが施されている土師器の壺、端部欠損している砥石であるが、他にロクロ調整の土師器の壺・壺・瓶、土師質土器、堤・相馬・美濃などの陶器、瓦、あまり遺存度のよくない鉄製品などが多数出土している。III層の出土遺物は、図示できたのが用途不明の鉄製品であるが、他に磨滅しているがロクロ調整の土師器の壺、陶器が出土している。IVa層の出土遺物は、図示できたのが、底部の切り離しは回転糸切りでその後ロクロで再調整された土師質土器、外面はロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている土師器の壺、釘であるが、他にも、ロクロ調整や非ロクロ調整の土師器の壺や壺・須恵器の壺・壺・瓶、堤・相馬の陶器などが出土している。



No	写真回数	出土地点・層位	種 別	器種	遺存度	法 気 (cm)	色 調	特 徴
1	43-1	北部 I・II層	土師器	壺	底部1/3	?	(7.0)	? にぼい青褐色 (外)?(磨滅)、一部ヘラケズリ (内)ナデ

No	写真回数	出土地点・層位	種 别	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴	
2	43-2	西部 I・II層	石製品	砥石	端部欠損	(4.8)	4.3	(3.6)	101.5	
3	43-3	B-1	相馬	鉄製品	用途不明	端部欠損	(7.3)	0.6	1.2	36.5

No	写真回数	出土地点・層位	種 别	器種	遺存度	法 量 (cm)	色 調	特 徴
4	43-7	西部 IV層上面	土師質土器	小壺	1/3	(11.8) 7.3 3.0	褐色	(内・外)ロクロ調整、片端内板系切後ロクロ調整
5	43-6	西部 IV層上面	土師器	壺	底部のみ	?	5.0 - ?	(外)にぼい青褐色 (外)ロクロ調整、底部内板系切 (内)黒色

No	写真回数	出土地点・層位	種 别	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴
6	43-4	西北 IV層上面	鉄製品	釘	両端欠損	(3.9)	0.7	0.8 2.8	
7	43-5	西部 IV層上面	鉄製品	釘	両端欠損	(3.2)	0.5	0.5 1.7	

第34図 その他の出土遺物

第3章 プラント・オパール分析

仙台市、安久遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1.はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

安久遺跡の発掘調査では、上層断面の観察において複数の層位で水田耕作層の可能性が推定された。そこで、耕作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行うことになった。

2. 試料

調査区の土層は、下位より灰褐色粘土（VI層）、黒褐色粘土（V d 層）、暗褐色粘土（V c 層）、黒褐色粘土（V b 層）、黒褐色粘土（V a 層）、褐色砂質シルト（IV d 層）、暗褐色粘土質シルト（IV c 層）、暗褐色粘土質シルト（IV b 層）、にぶい黄褐色砂質シルト（IV a 層）、黒褐色粘土質シルト（III層）に分層された。

分析試料は、IV a 層～V d 層において計 8 点が採取された。

4. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾 (105°C・24時間)、仮比重測定
- 2) 試料土約 1 g を秤量、ガラスピーズ添加 (直系40μm、約0.02g)
※電子分析天秤により 1万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電子炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42Khz・10 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20μm 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数（試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g)を乗じて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米 (2.94、種実重は 1.03)、キビ族はヒエ (8.40)、ヨシ属はヨシ (6.31)、ウシクサ族はススキ (1.24)、タケ亜科については数種の平均値 (0.48) を用いた (杉山・藤原、1987)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表 3 に示した。耕作跡の探査が主目的であるため、同定は、イネ、キビ族 (ヒ

エなどが含まれる)、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(スキキやチガヤなどが含まれる)の主要な5分類群を中心に行った。

採取された試料すべてについて分析を行った結果、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。このうち、ヨシ属はV b層、V c層、V d層で検出された。密度はいずれも低い値である。ウシクサ族はすべての層位より検出された。V d層で比較的高い以外はいずれも低い密度である。タケ亜科もすべての層位より検出された。IV a層、IV b層、V a層、V b層では比較的高い値である。

5. 考 察

本遺跡では、イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。したがって、本調査地点に関しては分析を行ったいずれの層位についても稻作の痕跡は認められない。

なお、各層位ともタケ亜科が優勢であり、ヨシ属は低密度あるいは未検出である。このことから、本遺跡一帯はV d層堆積時からIV a層堆積時に至るまで既に乾いた環境であったと推定される。

6. まとめ

安久東遺跡においてプラント・オパール分析を行い稻作跡の探査を試みた。その結果、いずれの層位においても稻作の可能性は認められなかった。

文 献

杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山—古環境編一、川口市遺跡調査会報告、10、p.281-298。

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、p.15-29。

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学、17、p.73-85。

検出密度(単位:×100個/g)

分類群 / 試料								
	IV a	IV b	IV c	IV d	V a	V b	V c	V d
イネ								
キビ族								
ヨシ属							6	12
ウシクサ族(スキキなど)	13	7	6	7	6	6	12	33
タケ亜科(おもにネザサ類)	179	113	88	73	141	101	87	91

推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ (イネ類)								
キビ族								
ヨシ属							0.40	0.73
ウシクサ族(スキキなど)	0.16	0.08	0.08	0.08	0.07	0.08	0.14	0.40
タケ亜科(おもにネザサ類)	0.86	0.54	0.42	0.35	0.68	0.49	0.42	0.44

表3 安久東遺跡のプラント・オパール分析結果

第4章 まとめ

I. 遺物について

今回の調査では各遺構および基本層から縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器・瓦・石器・石製品・金属製品・木製品などの遺物が2,597点出土しているが(表4)、確実な共伴関係が判るものはなく、図化できたものも少ないため年代が確定できるものがほとんどない。ここでは縄文土器についてのみ簡単に触れておきたい。

基本層IVa・IVb・Vb層中およびSD8から出土したものは磨滅しているため詳細は不明である。なお、SD8の年代は中世と考えられるため(後述する)SD8から出土したものについては周辺からの流れ込みと考えられる。図化できたのはVc層から出土した破片のうちの5点で、深鉢と考えられるものが4点、浅鉢が1点である。前章と一部重複するが、深鉢と考えられる個体(第32図2・3と5)について特徴をまとめると以下のようになる。

第32図2・3 ①文様帯が沈線で区画される。

②腹帶に連続する刻目が施される。

第32図5 ③小さな瘤状の張り付けと大形で装飾性のあるボタン状の張り付けがある。

④三叉状の沈線が刻まれている。

これらの土器は「瘤付土器」と呼ばれる範疇に入るものである。瘤付土器については田柄貝塚や福島県三貴地貝塚などからまとまった資料が出土しているので比較してみたい。

田柄貝塚との比較

①～④の特徴は田柄貝塚では第VII群土器に相当する。田柄貝塚では晩期の第VIII群土器との時期差が層位的にも確認されている。

三貴地貝塚との比較

②の刻目文は三貴地貝塚の深鉢A V類③、④の三叉文は三貴地貝塚の深鉢A VII類に相当し、いずれも縄文時代後期後葉の土器群とされている。三貴地貝塚では後期後葉の深鉢を第1～第5段階に細分し、深鉢A V類③は第4段階後半、深鉢A VII類は第5段階のものとしているので、今回出土した土器群は大体三貴地貝塚の第4段階後半～第5段階にかけての時期に比定されよう。

なお、三貴地貝塚の第5段階は田柄貝塚第VII群土器とほぼ同時期と推定されているのでこのことと今回の出土遺物の時期的関係も矛盾しない。

II. 遺構について

検出した遺構は溝(SD1～11)とピット(P1～22)のみであるが、このうち溝については切り合い関係から次の4段階に分けることができる。

第1段階

他の遺構より古い。(SD9・11)

第2段階

SD9より新しいが、その他の遺構よりは古い。(SD8)

第3段階

SD8・9・11よりも新しい。(SD1～4・7・10)

第4段階

最も新しい。(SD5・6)

編號 層・選擇		陶文 土器		土瓶器		繩繩器		須惠器		器		磁器		石器		鐵製品		木製品		漆器		織物		黑		粘		土		灰	
基 I	II	41	127	2	2	2	2	13	1	10	14	2	1	1	14	4	2	2	7	1	1	2	1	2	1	2	1	2	248		
基 III		10																												12	
基 IV	a	1	26	85	1	6	2			15		2	5																	149	
基 IV	b	2																												2	
基 V	b	20																												20	
基 V	c	47																												50	
S D	1	3	9	2	1	1																								17	
S D	4			1																										1	
S D	5		1	2																										4	
SD 6	ø 1	1	4																											21	
SD 6	ø 2	3	19																											27	
SD 8	上層	146	328	1	1	7	6	2	30																				523		
SD 8	下層	8	291	124	10	4	23	108	7	1	2	12	2															1,908			
SD 9	ø 1	1	10																											12	
SD 9	ø 2	6	24																											32	
S D	10	2	2																											7	
SD 11	ø 1	35	29	1	1																								66		
SD 11	ø 2~5	16	45																											63	
P	10	1	1																											1	
推	A	3	34	1	2	2																								431	
層	不 明	1	1																											3	
計		56	225	576	155	12	6	40	127	21	1	5	92	3	2	63	29	2	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	2397		
		78	1731	18																										2	
																														1	
																														4	
																														2	
																														1	

表4 瓦片集計表

これらの遺構から出土した遺物のうち年代がある程度確定できるものは以下のとおりである。

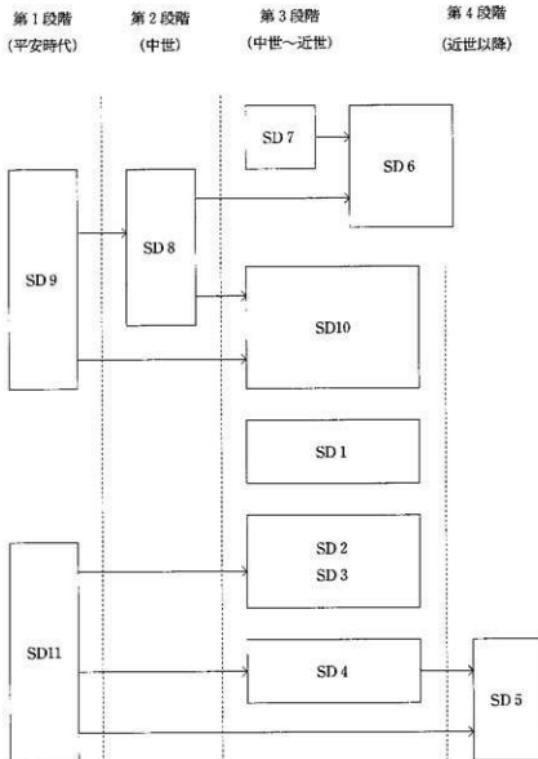
SD 9・11 ロクロ調整の土師器壺、同甕（平安時代）

SD 8 龍泉窯系 青磁碗（中世）

SD 6 土師質土器皿（中世後半～近世）

年代が確定できる遺物が極めて少ないため時期を絞り込むことはできないが、遺構の方向性や切り合い関係、遺物の年代からすると各遺構は第35図のような変遷が考えられる。なおピットについては性格も不明で、遺物もほとんど無いため時期は不明である。

第36図に当遺跡第1次調査区と隣接する安久東遺跡を含めた遺構の略図を示した。これによればSD 1とSD 3はそれぞれ北に延びることが確認され、SD 9は第1次調査区で第1号溝とした「コ」字状に巡る溝につながる可能



第35図 遺構変遷図

性がある。なお、今回調査したSD 8は規模が大きいことから安久東遺跡で確認されているような中世の堀跡あるいは基幹水路と考えているが、安久東遺跡との直接の関係については明らかではない。

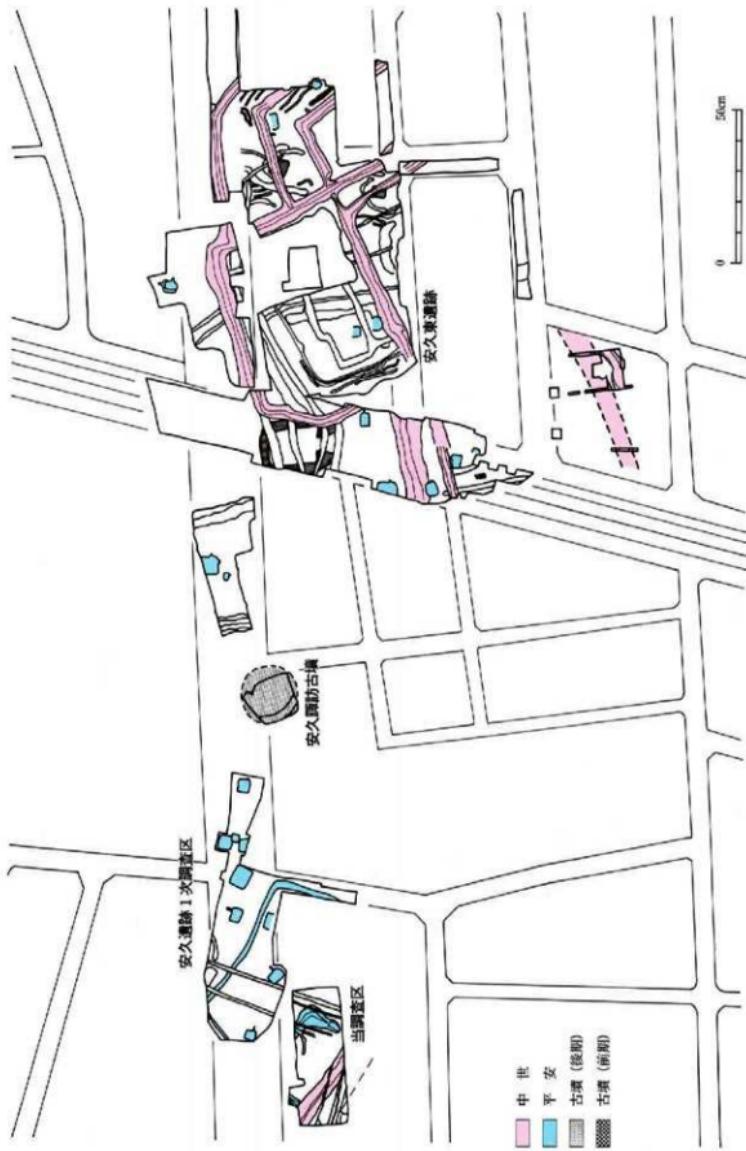
III. まとめ

調査の結果、IV a層上面で溝跡11条、ピット22基を検出した他、遺構は検出できなかったがV c層中から縄文土器と石器が出土した。前の記述と重複する部分もあるが、調査成果および問題点を整理すると以下のようになる。

1. V c層中から縄文時代後期後葉の土器、石器が出土した。当遺跡周辺の縄文時代後期の遺跡は名取川の北岸の六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、郡山遺跡などのように自然堤防上に立地する例が多く認められ、当遺跡も同様のありかたを示しているといえる。また当遺跡の西側の高館丘陵に位置する金剛寺貝塚は、後期後葉の「金剛寺式」の標識遺跡でもあり、当遺跡との関連も予想される。
2. IV c層・IV d層の下面の凹凸が激しく、耕作土である可能性が考えられたためプラント・オパール分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった。
3. 平安時代の溝跡2条が検出されたが、このうち1条は第1次調査検出の溝につながる可能性がある。全容は不明ながらも平安時代の集落が南側にも広がることが確認された。
4. 中世の堀跡あるいは基幹の水路と考えられる大規模な溝跡を検出した。また、橋脚らしい材やピットも確認している。安久東遺跡との直接の関係は不明であるが、何らかのつながりは予想されよう。
5. 上記の溝跡から多量の川原石が須恵器と共に出土した。安久東遺跡でも同様の状況が認められており、古墳が中世頃の土木工事によって破壊された可能性が指摘されている。断定はできないが、当遺跡でも同様のことことが予想される。

引用・参考文献

- 伊東信雄他 1975『安久遺跡発掘調査報告』仙台市中田第一土地区画整理組合
- 岩瀬康治・田中則和『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集 仙台市教育委員会
- 氏家和典 1957『東北土師器の型式分類とその編年』『歴史』第14輯 東北史学会
- 太田昭大 1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集 仙台市教育委員会
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974『多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』『研究紀要1』宮城県多賀城跡調査研究所
- 加藤孝他 1986『宮城県仙台市安久東遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第2集 埋蔵文化財調査研究所
- 木村浩二 1993『安久遺跡』『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集 仙台市教育委員会
- 庄子貞雄・山田一郎 1980『宮城県北部に分布する灰白色火山灰について』『多賀城市-昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡研究所
- 紫桃正隆 1973『史料仙台領内古城・館』宝文堂
- 白鳥良一 1980『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 仙台市史編纂委員会 1995『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市
- 竹田幸司 1997『安久遺跡(4次調査)』『高柳遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第223集 仙台市教育委員会
- 土岐山武 1980『安久東遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集 宮城県教育委員会
- 丹羽茂他 1981『清水遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集 宮城県教育委員会
- 平間亮輔 1993『安久東遺跡-第3次発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第174集 仙台市教育委員会



第36図 安久道路・安久東遊跡全図 (地図2)

写 真 図 版



写真 1
基本層序 (1)



写真 2
基本層序 (2)



写真 3
調査風景



写真 4
SD 1・2 確認状況（南から）



写真 5
SD 1・2 完掘状況（南から）

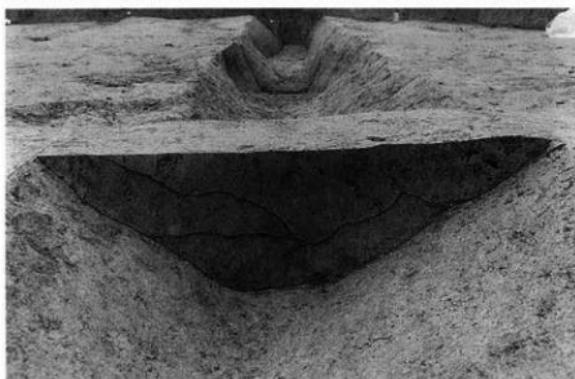


写真 6
SD 1 断面（南から）

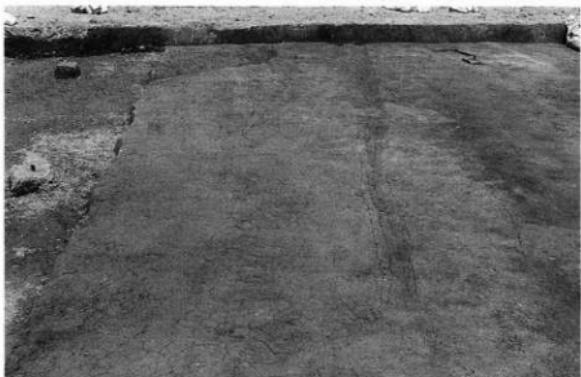


写真7
SD 3～5 完掘状況（南から）



写真8
SD 5 完掘状況（西から）

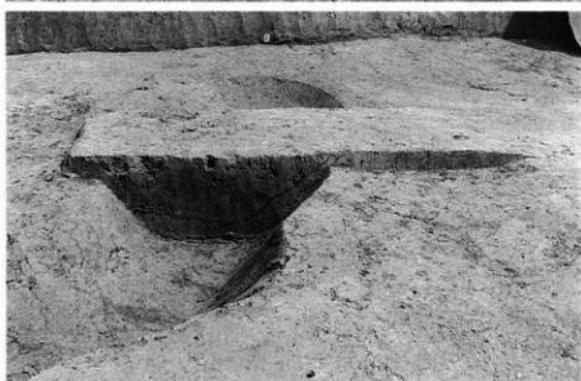


写真9
SD 4・5 断面（南から）



写真10
SD 6 確認状況（東から）



写真11
SD 6 実掘状況（東から）

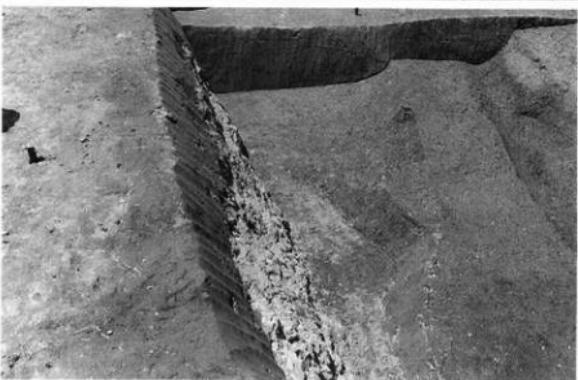


写真12
SD 7 実掘状況（東から）



写真13
SD 6・7断面（東から）



写真14
SD10 完成状況（東から）



写真15
SD 8 確認状況（南東から）



写真16
SD 8 調査風景（南東から）
—堆積土上層を除去した状況—



写真17
SD 8 調査風景（南東から）
—堆積土中層を除去した状況—



写真18
SD 8 横面
—溝状の産みの確認状況—



写真19 SD 8 完掘状況（南東から）



写真20 SD 8 橋脚ピット（西から）



写真21 SD 8 橋脚ピット（東から）



写真22 SD 8 漆器底出土状況



写真23 SD 8出土の河原石



写真24
SD 8断面 (B-B')



写真25
SD 8断面 (C-C')

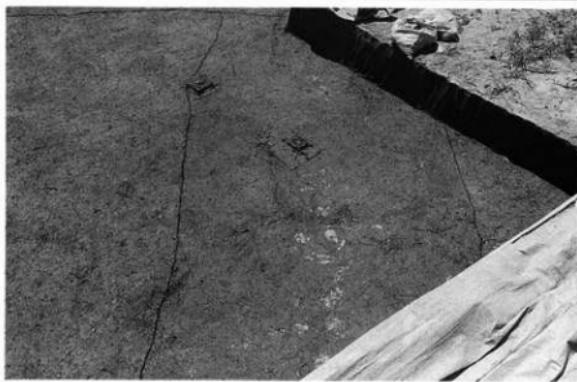


写真26
SD 9確認状況 (北東から)



写真27
SD 9 完掘状況（南西から）



写真28
SD 9 断面（南西から）



写真29
SD11 確認状況（南から）



写真30
SD11 完掘状況（南から）



写真31
SD11 完掘状況（西から）



写真32
SD11 断面（南から）

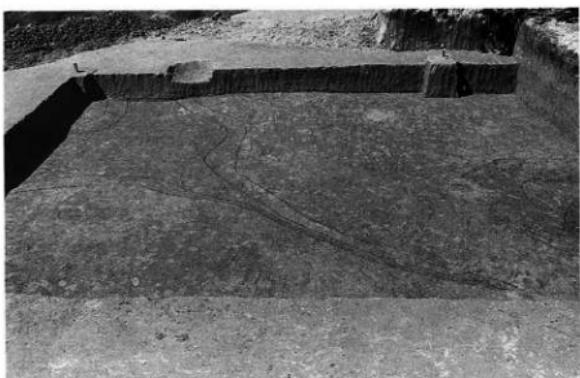


写真33
A-3 試掘区
V a 層上面検出状況
(東から)



写真34
A-3 試掘区
V c 層中遺物出土状況
(南から)



写真35
B- 4 試掘区
V a 層上面検出状況 (南から)

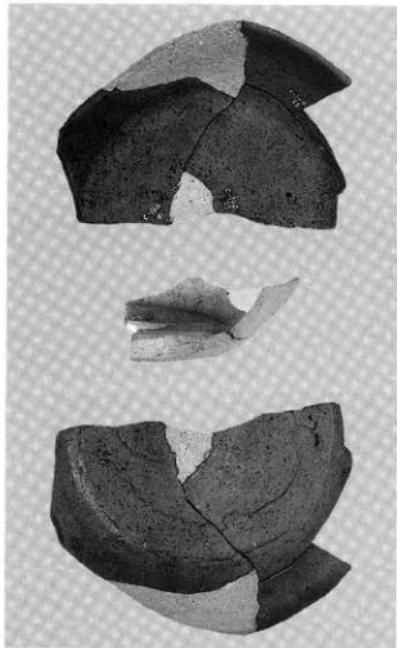


写真36 SD 6 出土遺物（土師質土器・小皿）

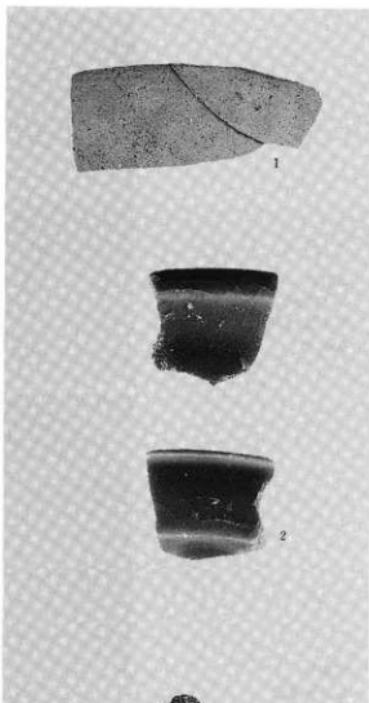
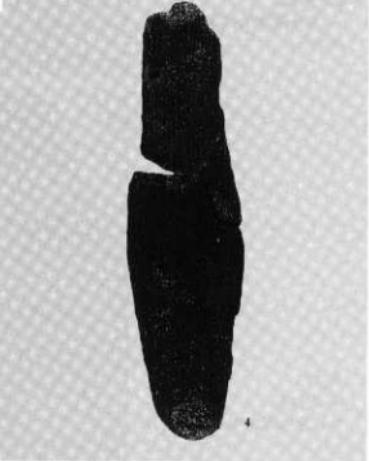


写真37 SD 8 出土遺物（1）
（1.土師質土器・小皿、2.磁器皿、3.須恵器鉢、4.用途不明木製品）



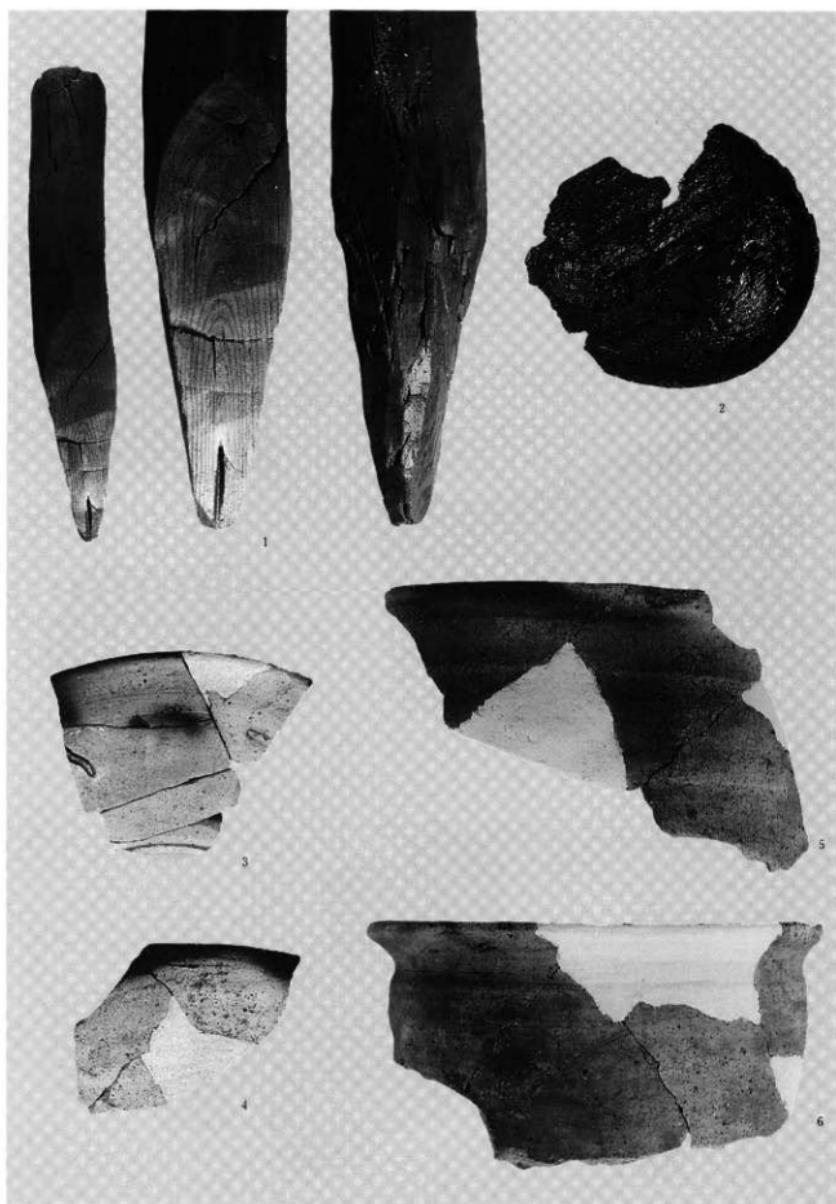


写真38 SD 8出土遺物（2）
(1.木製杖、2.漆器杖、3・4.土器器・环、5・6.同上)

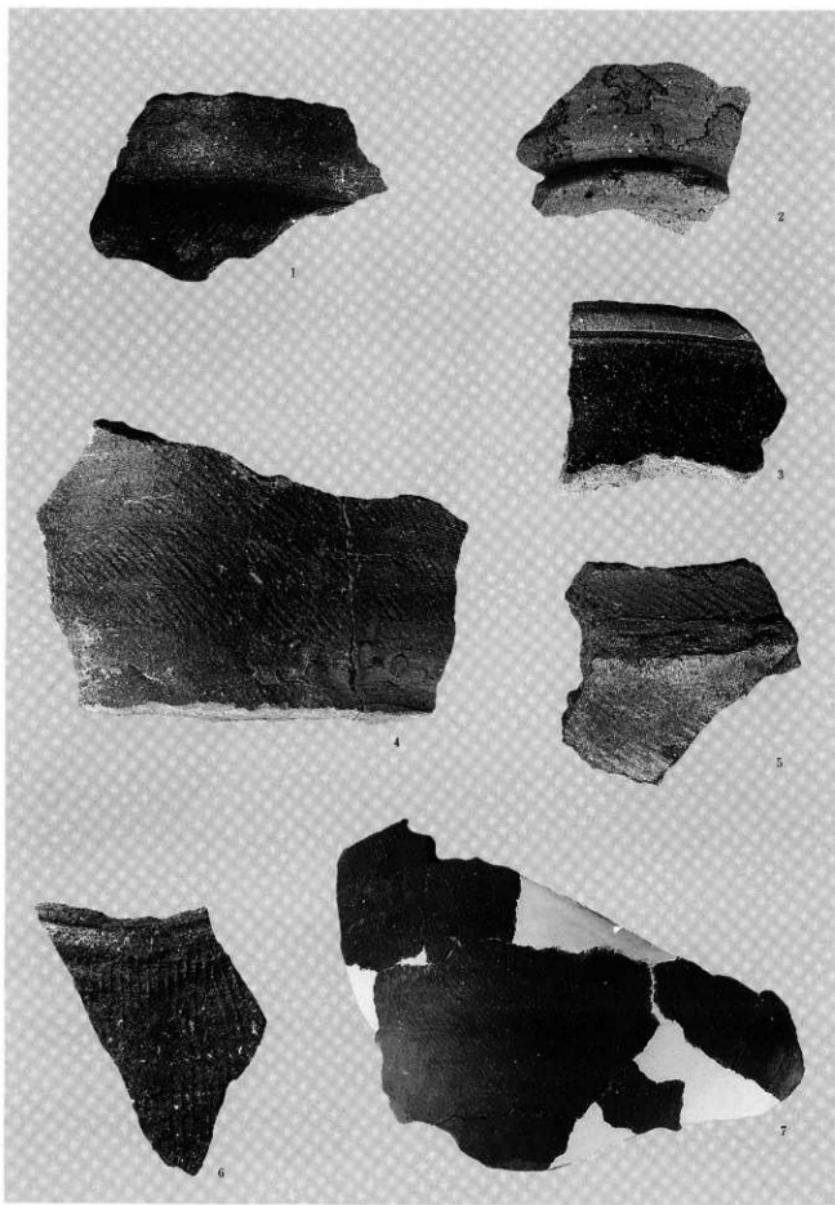
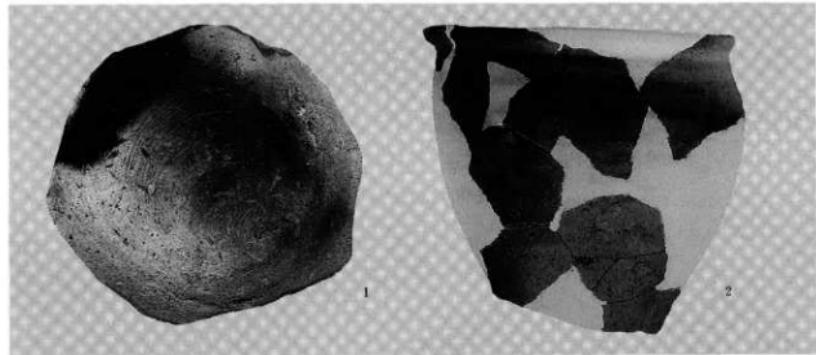
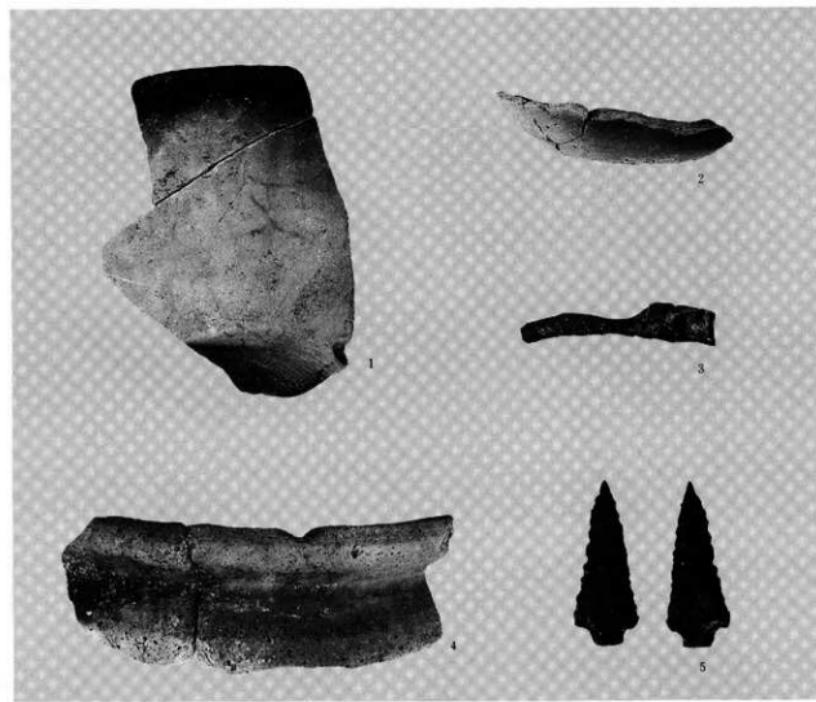


写真39 SD 8出土遺物(3)
(1.縄文土器・深鉢、2.須恵器・長頸瓶、3~7.同上)



1

2



1

3

4

5

写真41 SD11 出土遺物

(1・2.土器器・壺、3.鐵製品・釘、4.土器器・壺、5.石器・石鏡)

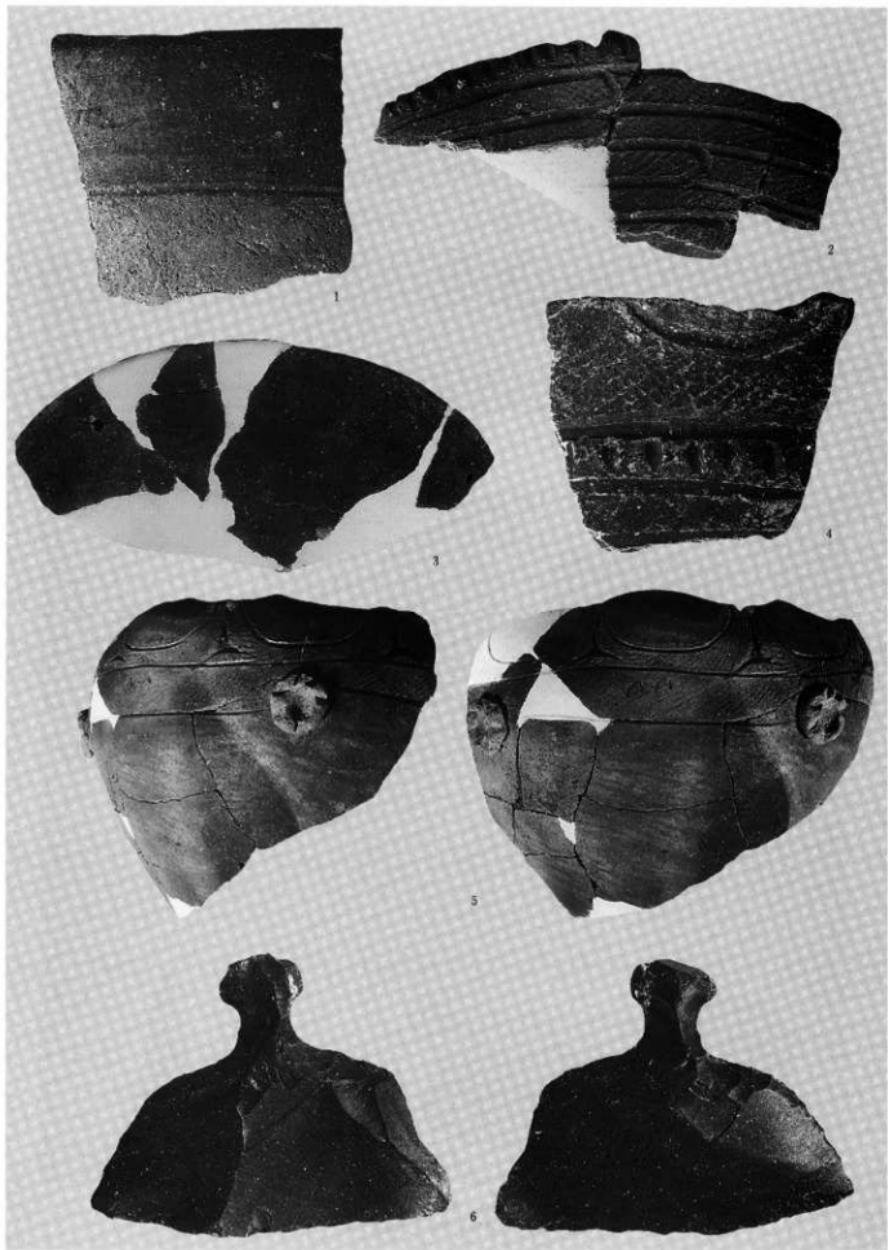


写真42 A-3 試掘区Vc層出土遺物
(1・2・4・5. 鑄文土器・深鉢、3. 同浅鉢、6. 石鼎)

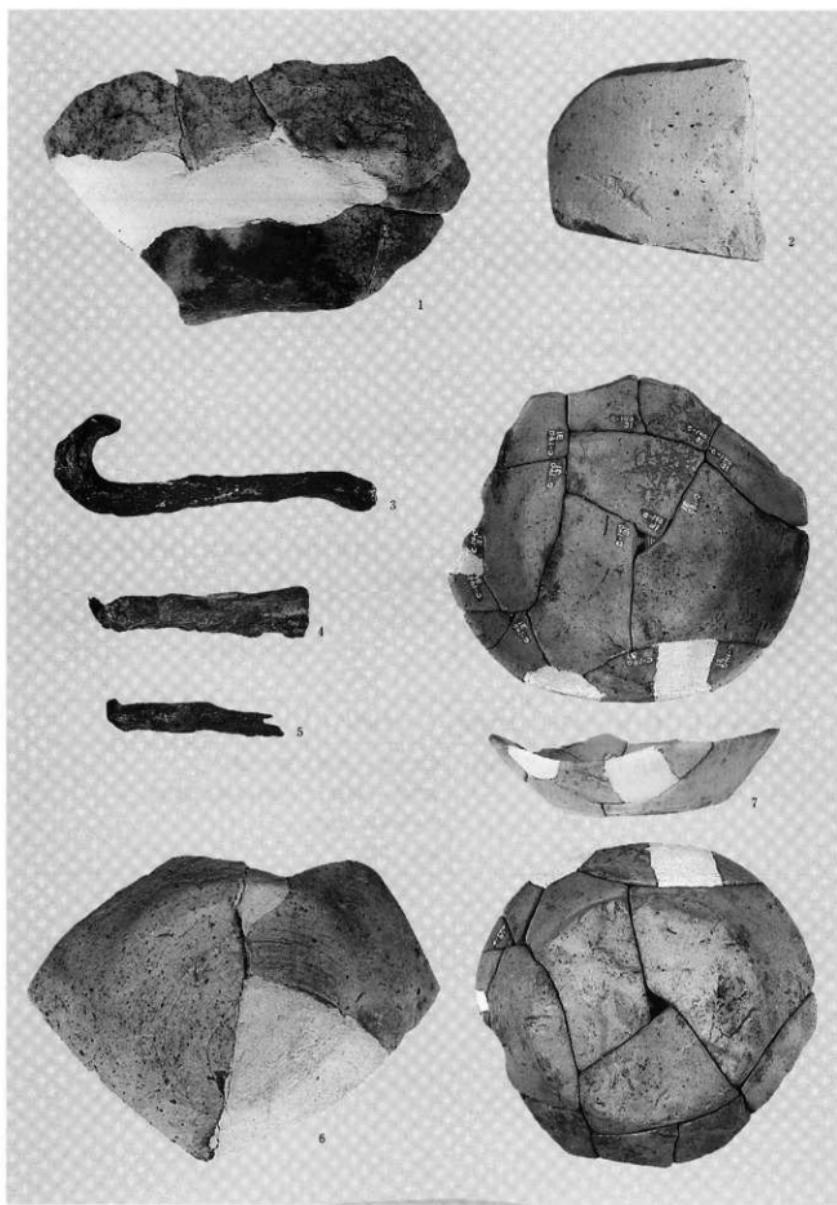


写真43 その他の出土遺物

(1.土師器・甕、2.砾石、3.用途不明鉄製品、4・5.円釘、6.土師器・壺、7.土師質土器・小皿)

報告書抄録

ふりがな	あんきゅういせき							
書名	安久遺跡							
副書名	第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	平間亮輔・伊藤孝行							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893~8894							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	市町村	遺跡番号						
安久遺跡 第3次	宮城県仙台市 太白区西中田 五丁目7-8	04100	01106	38° 11' 39"	140° 52' 56"	19960722 ~19960911	707m ²	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
安久遺跡 第3次	集落跡	縄文 平安 中世 近世	溝跡	繩文土器・土師器 須恵器・土師質土器・木製品・金属 製品・石器	瘤付土器 中世の大溝と橋脚跡			

仙台市文化財調査報告書第219集

あん きゅう 遺 跡

——第3次発掘調査報告書——

1997年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区園町三丁目7-1
022(214)8893~8894

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24
TEL 263-1166
